
長谷川千雨の過負荷(マイナス)な日々

蛇遣い座

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

長谷川千雨の過^{マイナス}負荷な日々

【Nコード】

N1485Y

【作者名】

蛇遣い座

【あらすじ】

かつて、長谷川千雨は『負完全』球磨川禊に出会っていた。少女に芽生えたのは強大な過^{マイナス}負荷と小さな恋心。これは、そんな少女のマイナスな物語。

プロローグ

時刻は夕方六時くらいだろうか。逢魔時とも呼ばれる頃、傷だらけの少女がとぼとぼと通学路を歩いていた。夕暮れの薄暗い道路のアスファルトには一人分の影だけが落ちている。ランドセルを背負ったその少女の服はびしょ濡れで、泥塗れの汚れ放題。そして、手足にはおびただしい数の切り傷や打撲の跡が痛々しく残っていた。学校帰りの小学生とは思えないほどに重苦しく沈んだ表情が浮かんでおり、その瞳はヘドロのようにどろどろに濁っていた。端的に言えば、その少女は迫害されていた。

きっかけは些細なことだった。小学二年生のときに転校してきた少女。彼女は学園で起こる様々な非現実的な出来事を認められず、クラスメイトと言い争いになったのだ。誰もが常識だと思っている事象。それをいちいち必死になって大声で叫び回るのだ。そんなクラスメイトにしてみれば言い掛かりでしかない文句を毎日垂れ流されれば、誰だって関わるのが嫌になるだろう。小学校低学年ならばなおさら。つまり、それが彼女がいじめに遭った原因であった。

不幸だったのは、それが言い掛かりではないことか。彼女の言葉はすべて正しかった。この学園は異常な人間で溢れ返っていたし、異常な出来事に満ち溢れていた。しかし、いくら真実ではあるうと、学校と言う狭いコミュニティにおいては多数派の意見こそが正義なのだ。

それでも、彼女は不可思議な出来事を従順に認めることができなかった。

った。陸上部の生徒が徒競走で世界新を遙かに超えるタイムを叩き出したとき。空を飛ぶ教師の姿を見かけたとき。殴られた人間が十数メートルの距離を吹き飛ばされたとき。少女は周囲の人々に大声でわめき散らした。しかし、この学園においてはこれらの超常現象こそが常識なのだ。誰も疑問に思うことなどない。この学園では異常性による差別はなかったが、一般の小学生と同様のいじめは存在した。彼女がクラスの中で狂人としていじめの標的となるのは当然の帰結だろう。

そして、何よりも彼女を傷つけたのは、自分に様々なことを教えてくれた両親であった。女子寮に入った娘と離れ、学園都市へと転勤することになった両親は社員用のアパートに住んでいる。優しくかった父と母。寂しくなった少女は両親の元へ向かったのだ。訳が分からないと頭を抱えながら、最後の頼りとして。しかし、そこで数週間振りに会った両親からは信じられない言葉を聞く。

——何を言っているんだい？そんなのは当たり前のことじゃないか

少女は自分の頭がおかしくなったのかと絶望した。目の前が真っ暗になったかのような感覚。自身の疑問を吐露した少女に向かって返されたのは、これまでに自分に教えてくれたことを真っ向から否定する言葉だった。自分のこれまでの人生がガラガラと音を立てて足元から崩れていく錯覚を覚える。少女の疑問は誰一人として疑問に思っていないのだ。世界が丸ごと変質してしまったかのような違和感。しかし、客観的に見れば少女こそが異端なのだ。

考えてもみて欲しい。狼の群れが近付いてくるのを発見し、大声で村中に危機を知らせる少年。大切な村の仲間たちを守ろうと必死になって叫ぶ。しかし、その狼が村人には見えないものであったならば。そして、それが毎日のように続くとしたら。彼はオオカミ少年

と呼ばれるしかない。もしくは異常者と――

――それから四年。小学六年生になった彼女に対する迫害や虐待は続いていた。四年間、それは小学生のいじめの期間としては長すぎるものだろう。大抵はそれまでに転校するか、引き籠もるか、あるいは子供たちが飽きるか。しかし、彼女は例外だった。精神病院へと通わせようとする両親を味方だとは思えなくなっていた少女にとって、学校へ行くという行為こそが失われた日常へ回帰する唯一の道だったのだ。しかし、彼女は気付かなかった。暴力と屈辱こそが日常だったためか。少女を迫害するクラスメイトの顔が、愉悦や歓喜ではなく、恐怖と苦渋に歪んでいたことに――

今日もまたいつも通りの日常。放課後、集団にどぶに突き落とされ、ヘドロのような泥水を飲まされ、夕暮れの通学路を帰宅していた。とぼとぼと下を向いて歩いていたのが良くなかったのだろう。

「きゃっ！」

ドンッと前方不注意で正面を歩いていた人にぶつかってしまった。慌てて前を向いて謝ろうとして――その瞬間、全身に怖気が走った。

『ごめんごめん。ぶつかっちゃったね。僕は悪くないけど、お互い運が悪かったみたいだ』

「……っ！」

目の前に幽鬼のように佇んでいたのは、学ランを着た中高生くらいの男子だった。黒髪黒眼、中肉中背で童顔のかわいらしい顔立ち。しかし、そんな普通の外見など全く目には入って来なかった。むしろ、一見すると普通に見えることすら恐ろしい。この世すべての負の要素を煮詰めて濃縮したかのような、圧倒的なマイナスの存在感。一瞬にして、背筋に氷を突っ込まれたような悪寒に襲われた。反射的にその男から目を背ける。そして、そんな自分の行動に一番衝撃を受けたのは他ならぬ少女自身だった。驚愕の形に顔面の筋肉が引き攣る。

——私よりも最低な人間なんて存在していたのか

彼こそが世界で最もマイナスな人間だと、強制的に悟らされた。全ての負の感情が無理矢理心の底から呼び起こされる。そんな男を前にして、少女の肉体は戦慄で小刻みに震えていた。

『へえ、君ってこの学園の生徒？道端で女の子とぶつかるなんて少年ジャンプの恋愛モノみたいだね。まさか、僕にそんな漫画みたいな出来事が起こるなんて思わなかったよ。だって、大抵の女の子は僕とぶつかるどころか、近寄ることすら絶対ないからさ』

無邪気な笑みを浮かべて男は少女に話しかける。少女自身の意志に反して、手足は極寒の雪山にいるかのようにガクガクと揺れ、鳥肌が立っていた。しかし、それは不気味な雰囲気や気持ち悪さだけのせいではないのも理解する。自分の感情がうまく掴めなかったのは少女にとって初めてのことだった。震える声で目の前の男に対して声を発する。

「あ、あんたは……」

『うん？僕？僕は球磨川禊。よろしくねっ』

「球磨川……禊」

その名前を心に刻み込むようにつぶやく少女。球磨川と名乗った男は泥だらけの制服や傷だらけの手足には目もくれず、覗きこむように顔を近づけて少女の瞳を見つめた。

『それにしても、ずいぶん素敵な瞳をしているね』

「……そんなこと初めて言われたよ」

『いやいや。謙遜しなくてもいいよ。世界そのものを憎んでいるかのような、どろどろに濁った瞳。とつても素敵だぜ』

罵倒しているとしたか思えない言葉だが、少女にはそれを本心から褒めているだろうと理解できた。そして、少女から見た球磨川の瞳も、墨汁のように黒く濁った暗黒の渦を彷彿とさせる深淵だった。同時に、腐った死体のような不気味さと気持ち悪さも兼ね備えている。とても人間の瞳だとは思えなかった。

「あ、あのさ……」

意を決したように少女は球磨川に声を掛けた。その顔はわずかに上気しているように見える。この不気味な男と言葉を交わしてみても、ようやく少女も自身の胸に湧き上がってくる感情を言語化することマイナスに成功していた。それは、自分よりも最低な人間が存在するという安心感。そして、もうひとつは――

気が付けば、少女は自身に起きた出来事について相談していた。

『なるほどね。きみの話は分かったよ。大変だったね』

「信じて……くれるんですか？」

『当たり前じゃないか。正直な話、僕も君の言うところの非現実的な出来事を、不思議だとは全く思えないんだけどね。だけど、きみの感覚を信じるよ。間違いなく、きみの言うことが正しいんだ。きみは悪くなんてない。正しくないのは世界の方なんだよ』

初めて自分の言うことが肯定された。それは、少女が最も望んでいたことだった。先生にも友達にも、両親にすら信じてもらえなかったことを、初めて会ったこの男だけが信じてくれたのだ。目頭が熱くなり、嬉しさの余り自然と目尻から涙が零れ落ちる。ニコニコと変わらぬ笑みを浮かべながら、球磨川は言葉を続けた。

『だけど、正しさなんてどうでもいいじゃないか。世界との不和を気にすることなんかないんだよ』

「え？」

『だって、世界は正しくなんてないし、人間は美しくなんてないんだから』

なぜか、その言葉は少女の胸に染み入るように侵食する。

『そんな理不尽な世界には、きみが求めるような真実も常識も正解も存在しない。——受け入れることだよ』

両腕を大きく広げ、大見得を切るように言葉を続ける。

『不条理を』 『理不尽を』 『墮落を』 『混雑を』 『嘘泣きを』 『言い訳を』 『偽善を』 『偽悪を』 『いかがわしさを』 『インチキを』 『不都合を』 『不幸せを』 『冤罪を』 『流れ弾を』 『見苦しさを』 『みつともなさを』 『風評を』 『密告を』 『嫉妬を』 『格差を』 『裏切りを』 『虐待を』 『巻き添えを』 『二次被害を』

——愛しい恋人のように受け入れることだ

戦慄を覚えるほどに気味の悪い言葉の奔流。それらの負の要素をかき集めたものが、球磨川禊という存在のだと納得させられる。そして、一拍置いて一言を付け足した。

『そして、——空想を』

カチリ、と自分の中の何かが音を立てて噛み合うのを感じた。それと同時に、少女から目の前の男と同種の負のオーラが噴き出したかのようなだった。もし、この場に他人が居たならば、二人の周囲に空間が歪んで見えるほどの不気味な凶兆を感じ取ったことだろう。少女の口元はいびつに歪んで吊り上がり、その表情は死に顔のように不吉な気配を漂わせていた。

『うん。きみは将来有望な過負荷^{マイナス}だね。めだかちゃんに中学を追い

出されちゃったから、新しい転入先を探してたんだけど。最初にこの学校に来たのは当たりだったみたいだ。ま、この学園の人たちの異常性は僕の興味の範囲外なんだけどね』

常人なら足が竦むような凶々しい存在を前にしても、男の表情には一片の恐れすらなかった。どころか喜色満面の笑みを浮かべている。そして、少女はそれを自明のこととして受け入れていた。球磨川禊という存在の絶対性、いや負完全性。その虜になっていた。直後、少女の纏っていた寒気のするようなマイナスな雰囲気は消失する。

『さーて。面白いものも見れたし、そろそろ帰ろっかな。帰りに週刊少年ジャンプ買ってかないと』

「ま、待ってください!」

何事もなかったかのように背を向けて歩き出した球磨川を、少女はとっさに大声で引きとめた。少女の瞳はわずかに潤んでいて、その頬は熟れたトマトのように真っ赤に染まっていた。

『なんだい?』

「あの……ええと……また、会えませんか?」

何とかひねり出した言葉は、そんな唐突なものだった。しかし、対人関係のスキルが幼稚園時代までしかない少女には、それが精一杯の引きとめの言葉。

『うーん。この学園の異常者や異常性は僕らのそれとは違う感じがするんだよなー。何ていうか異常でも過負荷でもなくて、別世界の法則みたいな。週刊少年ジャンプで言えば、別の作品って感じかな。』

だから僕の目的には関係ないし、ここに転入するつもりはないよ』

「そうですか……」

俯いて暗い表情になる少女。その頭の上にポンと掌が乗せられる。ハッとした様子で顔を上げる少女の前には、笑顔を浮かべた球磨川の顔があった。

『そんな顔しなくても、またいつか会えるさ。だって、今日は一緒におしゃべりしただろう？ だったら、僕ときみは友達だ。きみの名前は？』

優しげに微笑む球磨川に、少女は服の袖で零れかけた涙をゴシゴシと拭きとって答える。

「は、はいっ！ 長谷川千雨です！」

『かわいらしい名前だね。それじゃ、また』

「いつかまた！ 絶対っ！」

軽く手を上げて去っていく球磨川。少女は大きく手を振って別れの挨拶を投げる。再会の約束を信じて、球磨川の姿が見えなくなっても手を振り続けた。

――それが、長谷川千雨の初恋だった

1時間目「担任になったネギ・スプリングフィールドです」

あれから二年が経ち、中学二年生になった私こと長谷川千雨はいつも通りに学校へと登校していた。球磨川さんに出会うことで発現した異常――過負荷は私の生活を一変させた。この学園の空想としか
マイナス思えない異常を認められるようになったからだろう。日常生活を送れる程度には、心の中にマイナス性を抑えることができるようになったのだ。今にして思えば、小学校時代における迫害や虐待は、私が自然と撒き散らしていた世界への憎しみや破壊衝動が原因だったのだろう。だけど、球磨川さんの言葉で救われた。世界は正しくな
マイナスんてないし、人間は美しくなんて無いのだ。そのおかげで、現在は流されるまま、全てを受け入れて墮落した学園生活を送れている。

麻帆良学園中等部二年A組、そこが私の通う教室である。その教室の扉を前にして、いつも通りの軽い溜息を吐く。この瞬間だけはどうしても慣れないんだよね……

「うつ……」

ガラッと扉を開けて教室へと入る。それと同時に頭の中に大量の情報が叩き込まれた。その非現実的な情報の奔流に小さく呻く。目を閉じ、視界からクラス内の光景を消去し、再びまぶたを開く。

――なんつー異常度だよ

自分の掛けている眼鏡のつるを指先で握り、そう心中でつぶやいた。視界にはいつも通り騒々しい女子中学生たちの姿。普通とは到底言えない面々だが、それはすでに受け入れていた。自身の過負荷によ
マイナスって、知りたくもないことも知ってしまうのは困りものだが、問題

といえばそれくらいで、つまりは平穏な学園生活と言えるだろう。
ちなみに『過^{マイナス}負荷』とは、私や球磨川さんのような人間の底辺を這い蹲る連中の総称だ。私たちの発現する異能力、スキルを指す場合もあるらしい。詳しいことは私もよく知らない。図書館島に収められている埒外な量の蔵書ですら見つけられなかったほどのだから。

「千雨さん、おはようございます」

「綾瀬か。おはよう」

自分の席に着いて鞆を降ろすと、近くの席に座っていた綾瀬夕映に声を掛けられた。マイナス性を隠せるようになったため、クラスに溶け込んでクラスメイトと会話することもできる。私は綾瀬に挨拶を返した。

「にしても、この騒ぎはなんだよ。いつにも増してはしゃいでるみてーだけど」

「それなんですけど、千雨さん。どうやら今日から担任の先生が変わるそうですよ。朝倉さんが言っていました」

「ああ、なるほどな。そりゃ、うちのクラスは大騒ぎにもなるか」

やれやれと首を左右に振った。私の配属されたこのクラスが異常であることは受け入れたが、それに同調するかは別だ。というか、迫害され、虐待され続けてきた私にこのノリで騒げと言う方が無茶だろう。

「相変わらず興味薄そうですね。私ですら内心では新しい先生には興味津々なのですが」

「あんまりそうは見えねーけどな」

無表情で淡々と話す綾瀬に苦笑する。だけど、この異常なクラスをまともな教師が担当するとは思えない。おそらくは高畑と同等の異常度の奴が来るに違いない。あまり期待しない方がよさそうだ。

始業のチャイムが鳴り、私たちは自分の席に着席して静かに先生を待つ。しかし、ほとんどの生徒が興奮を抑えきれていないようで、そわそわしているのが丸分かりだった。コツコツと廊下から足音が聞こえ、扉の前に立った気配がする。その直後、教室へ入ってきたのは、小学生くらいの男の子だった。

「うわあああああ！」

扉に仕掛けられたトラップに引っかかり、黒板消し、水の入ったバケツ、おもちゃの矢の雨という連続技を受けてすっ転ぶ少年。先ほどクラスメイトが仕掛けたいはずだ。

「ちょ、ちょっと大丈夫!？」

「何で子供が来てるのよー」

慌てて駆け寄るクラスメイトたち。それを横目に見ながら、私はまたしても軽く溜息を吐いた。問答無用で他人のプライバシーを蹂躪する瞳。『世界の不具合を見抜く』という性質を、球磨川さんによってデチューンされることで生まれたのが――

——『他人の隠し事を暴く』という私の過^{マイナス}負荷である。

それによつて私は、目の前の少年が一般人ではないことに気付いていた。というか魔法使いだった。それもかなりの異常度。もはやクセとなった眼鏡のつるを抑える動作をしながら、やれやれと首を左右に振る。またか……、と多少うんざりするのもし方がないだろう。このクラスには重大な隠し事をもつ者が多すぎる。もし口が滑ろうものなら、即刻首が飛ばされかねない。それも物理的に……。この異常度の高すぎるクラスに配属しやがったのは嫌がらせとしか思えないぜ。ま、嫌がらせなら慣れっただけど……。それに実際のところは、隔離クラスに配属されたのは私が過^{マイナス}負荷だからだろう。

そんなことを考えている間に、少年はしずな先生に連れられて教壇へと上がっていた。

「今日からこのクラスの担任になったネギ・スプリングフィールドです！ よろしくお願いします！」

「「「かわいいー！」」」

外国人とは思えない流暢な日本語で少年が挨拶した瞬間、教室が甲高い悲鳴で埋め尽くされた。群がるように子供先生、ネギ・スプリングフィールドの元へと殺到する生徒たち。

「ねえねえ、歳はいくつ？」

「何で子供なのに先生なの？」

「お姉さんに興味とかない？」

「あ、あわわ……」

群がる女子たちに、子供先生はパニックのような顔で呻き声を漏らしている。私はその流れに乗らずに自分の席に座ったままだ。子供が教師になるなど本来なら有り得ない。かつての私ならそう叫んだだろうけど、今の私にはそんなことはどうでもいい。あっさりと教壇へ向けていた視線を反らし、普段通りに鞆から教科書とノートを取り出すのだった。

——授業は特に問題なく終了した。と言っても、私は隠れて机の下でネトゲをしてただけだな。

そして放課後、私たちはネギ先生の歓迎パーティーの準備にいそしんでいた。あまり興味はなかったが、誘われたら絶対に断らないのが私の信条。言われるがままに飲み物の準備を行っていた。教室ではクラスメイトたちが、わいわいとはしゃぎながら思い思いに準備をしている。コップにジュースを注ぎながら、辺りをゆっくりと見回した。

『翼人のハーフ』『吸血鬼』『アンドロイド』『幽霊』……。

脳内に強制的に叩き込まれてくるこれらの単語は、とても現実のものとは思えない。学園そのものが異常の塊だけど、特にこのクラスは群を抜いている。それはこの子供先生、英雄の息子とやらのため

なのか、それとも……？

「や、千雨サン。この間渡したP Cの調子はどうヨ？」

「超か……ああ、動作が軽すぎて驚いたぜ。携帯ゲーム機サイズなのに、私のデスクトップよりもサクサクってどういうことだよ。あんな高スペック機もらっちゃってよかったのか？」

「構わないヨ。私たちの実験で使ってたやつのおさがりだからネ」

「これより高性能P Cを使ってんのかよ！スパコン並だぞ、これ……」

私に声を掛けてきたのは中国人風の少女、超鈴音。趣味がネットゲだと話したらP Cを贈呈してくれたのだ。しかも超絶高スペック。どうやら自作の物らしい。一見すると普通の少女だが、その実態はこの世界でも随一の異常度を誇る未来人である。何だよ、この生年月日は……。しかも魔法使いでもあるという、秘守義務の塊のような女子である。

「それより、授業中にネットゲなんて感心しないネ。成績落とすくらいなら返してもらおうヨ」

「あんたは私のお母さんか！だけど、携帯サイズでデスクトップ以上の性能なんだから、普段から使わないともったいないだろ？テストしてたんだよ」

「相変わらず適当なことばかりネ」

呆れたように肩を竦める超。

「新しく担任になった子供先生はどうかナ？」

「授業は問題なかったみたいだよな。ま、エスカレーターだからテスト前に少し勉強すれば進学くらいはできるだろ」

「ハア……千雨サンはもう少し目標を持って生きたほうがいいと思うネ。放課後も休日もネットゲ三昧なんて廃人生活は脱却しないとダメヨ」

「そういうのはもう聞き飽きたぜ」

あーあー、と耳を塞ぐフリをしてみる。超も諦めたように小さく笑った。

「じゃあ、私は料理の準備に戻るネ。だけど覚えておいて欲しいヨ。――あなた達のような人間でも、きつと改心することはできるはずネ」

「……!？」

反射的に視線を戻すが、すでに超は同じく料理の準備をしていた四葉の元へと去ってしまっていた。……あいつ、私の過負荷マイナスのことを知っていたのか。

そして、とうとうネギ先生が教室へと現れた。全員でクラッカーを

鳴らして歓迎パーティーが開始される。もみくちやにされる子供先生を眺めながら、私は離れた場所で超包子の中華料理をパクついていた。相変わらずとても一般生徒が作っているとは思えない味だ。

「おかわりはどうかナ？千雨サン」

そう言って超が新しい皿をこちらの机の上へと運ぶ。

「せっかくのパーティーだからネ。料理はたくさんあるヨ」

「ありがたいけど、これ以上食べたら太っちゃうから遠慮しとく。ただでさえ帰宅部で運動しないんだしな」

「なら次の機会には、もう少しヘルシーな料理をお出しすることにするヨ」

料理を置いて戻ろうとする超の腕を掴んで引き止める。先ほどの疑問に答えてもらわないと。私は眼鏡越しに睨みつけるように詰問する。

「お前、私ら過^{マイナス}負荷のことを知ってんのか？」

私の言葉に超は口元を吊り上げ、楽しそうな笑みを作った。あごで外へ出ると要求され、教室を離れていく超の跡を追って廊下へ出る。

「知ってるヨ。低劣にして劣悪、虚弱にして脆弱。ありとあらゆる負の要素の塊。それがあなたたち過^{マイナス}負荷ヨ。この学園では知っている人なんてほとんどいないだろうけどネ。魔法世界にはいないという事情もある」

「私のことは誰から？」

「ふふっ……見れば分かるヨ。『麻帆良の最強頭脳』なんて大層な二つ名で呼ばれてるけど、私も負け組の人間だからネ。時折見せるその気持ち悪さは間違いなく過負荷^{マイナス}ヨ」

その指摘に私は軽く肩を竦めるフリをしてみせる。ま、別に知られてたからって問題はなかったんだけどな。ただ気になったから尋ねただけだし。

「だけど、その中でも千雨サンの過負荷^{マイナス}はかなり高い絶対値を感じるネ。ぜひ見てみたいものだヨ。奇想天外にして摩訶不思議、空前絶後にして驚天動地。魔法とは違う理屈を超越したスキルを――」

「……見せてやってもいいぜ？」

私の周囲に漂う雰囲気が暗く冷たくなっていく。背筋が凍るような不気味な予感を覚えたのか。不吉で凶々しい気配に超の表情がわずかに曇った。

「フフ……絶対にごめんネ。魔法とは違う法則の出鱈目な現象を起こすと聞いているヨ。そして、それらのスキルは例外なく最低で最悪なものだともネ」

ひらひらと両手を上げて降参の姿勢を見せる超。その表情に余裕が窺えるのは、戦えば自分が勝つと確信しているからだろう。その瞳には面白いものを見たという興味が浮かんでいる。実際、超の隠された能力を見る限りにおいて、過負荷^{マイナス}を使ったところで私じゃ手も足も出ないだろうしな。

「あれ？超さんと……千雨ちゃん？」

「……神楽坂とネギ先生か。どうしたんだ？主役が出て来ちゃっていいのか？」

子供教師とクラスメイトの神楽坂が階下からこちらへと上ってきた。子供先生と二人きりで何の話をしていたのかと尋ねると、神楽坂はあははとわざとらしい笑い声で誤魔化した。

「そ、そっちこそ超さんと千雨ちゃんなんて、珍しい組み合わせじゃない」

「千雨サンはパソコンが趣味なのでネ。たまに試作品のソフトとか使ってもらったりしてるヨ」

「へー、そうなんだ」

「えと、長谷川さんと超さん、ですよね。明日からもよろしく願います」

そう言ってペコリとお辞儀をする子供先生。一見すると普通の礼儀正しい子供だ。……いや、それはないか。背中にしよっている馬鹿でかい杖が異質すぎる……。

「こちらこそよろしく願います。ネギ先生」

「よろしくネ。あと、私が出している『超包子』って店も是非来て欲しいヨ」

こうして、子供先生の就任初日は無事に終了したのだった。

2時間目「私達は麻帆良ドッジ部『黒百合』!」

子供先生が私達のクラスの担任になってから数日が過ぎた。授業内容は特に問題なく、普通に教師を勤めることができている。ただ、たまに子供だからという理由で面倒事が起こることがあり、今日のこれもそうだった。

「私達が勝ったら子供先生を頂くわ!」

「上等よ!その代わり、私たちが勝ったら二度とくだらないちょっかい掛けてこないでよね!」

授業時間を利用したレクリエーションで、私たちのクラスはバレーボールを行う予定だった。しかし、中等部校舎の屋上には嫌がらせをするように高等部の先輩方が陣取っていた。聖ウルスラ女子高等学校2-D。最近、うちのクラスにちょっかいを掛けてくる連中だ。わざわざ中等部に喧嘩を売ってくる理由が――子供先生を自分のクラスに欲しい、というもの。さすがに呆れて言葉も出ない。

勝負の方法はドッジボール。ハンデとして高校生側が11人对中学生側が22人。ドッジボールでは人数はあまりハンデにならないと思うのは私だけだろうか。ま、戦力的にはこちらが圧倒的に上なんだけど……。

「それじゃ、行くわよー!」

神楽坂が凄まじい威力のボールを投げつける。一般人の枠内としては強烈な一撃。それを相手の高校生は軽々と片手で掴んでいた。

「なっ！」

へえ、と感嘆の声が漏れる。神楽坂の運動神経はかなりのものだ。そのボールをあっさりと受け止めるとは、この先輩方も並ではない。ま、私にはその理由が分かっているけど……

「千雨ちゃん！」

「え？……ぐべっ！」

相手の投げつけたボールが私の顔面にぶつかり、情けない声と共にぶっ倒された。

「ちょっと大丈夫！？」

「うぐう……だ、大丈夫だ」

無様に仰向けに倒れた私に駆け寄ってくるクラスメイトたち。手をひらひらと振って無事を示しながら、外野へとふらつきながら出て行く。

「ほほほっ！ 私たちは関東大会優勝チーム！ 麻帆良ドッジ部『黒百合』！ あなたたちに勝ち目なんてないわ！」

傲慢な高笑いをする先輩たち。彼女たちはドッジボール部員。そもそもが自分たちに有利な勝負だったのだ。当然、帰宅部員で半ばネトゲ廃人の私が太刀打ちできるはずもない。顔面は反則だろ、なんて言うこともなく素直に外野へと移動する。それから、意外にも順当にうちのクラスが当てられる展開だった。

「きゃん！」

「うわぁ〜です」

見る見る内に減っていく内野陣。異能力者や超人連中は手を出さないようだ。適当にぶつかって外野へと移っている。そのため、神楽坂などの『気』の使えない面々が主力。ま、負けたからって本当に担任が代わるはずもない。せいぜいが一日ネギが愛でられる程度だろう。はつきり言って中高生のじゃれあいだ。おかげでレクリエーションとして成り立つ程度には試合は白熱していた。

「どう？ぶつけられた顔の具合は」

「ん？ああ、傷ひとつ付いてないよ」

「そりゃよかった」

座り込んで休んでいる私に声を掛けてきたのは、早乙女ハルナだった。いつも一緒にいる綾瀬と宮崎の姿もある。三人は試合を観戦しようとする隣へと腰掛けた。早乙女は漫画を描くのが趣味という陽気なおタク女子だ。ときおり訳の分からない台詞を垂れ流すのが困りモノである。

「にしても、千雨ちゃんが一番だよねー。このクラス、ラブ臭が全然だしさ。恋バナ聞かせてよ」

「何だよ、そのラブ臭ってのは……」

「またハルナの病気がはじまったです」

何やら鼻息を荒くして詰め寄ってくる早乙女と、それを呆れたように眺めている綾瀬と本屋。早乙女はキラキラした瞳で私の顔を覗きこんできた。

「ほら、噂の千雨ちゃんの片思い相手のこと!どうなったの?」

「ん?聞きたいのか?」

「うんうん!」

食い入るように顔を近づけてくる早乙女。綾瀬と宮崎も少し顔を赤らめながら、聞き耳を立てているのが分かる。興味津々みたいだし、三人に少し私の恋を教えてやるか。私としても球磨川さんのことを話すのはやぶさかではない。というか誇らしい気分だ。

「ええと、球磨川さん……だったかな。どこに通ってるの?たしか高校生だったよね」

「今月からは球磨川さんは水槽学園に転校してるぜ」

「へー、水槽学園っていったら全国有数の名門校じゃん。頭いいんだね」

「ですが、転校というと、御両親の都合か何かですか?」

「いやいや、そうじゃねーよ。そんな幸せ（プラス）な理由のほずないだろ?」

笑いながら手をひらひらと左右に振る。むしろ、球磨川さんに親が存在しているということが想像できないくらいだ。それほどにあの

人は存在として完結している。

「もちろん、通っていた学校を完膚なきまでに廃校にしちゃったからだよ」

笑顔で誇らしげに口にする私の姿を、三人は理解できないといった風な表情で見つめていた。目を丸くして絶句している。

「球磨川さんは定期的に通う高校を潰しちゃってさ」

「は、廃校というと……」

「ん？文字通りだよ。何もかも、教師も生徒も、校舎も校庭も、規律も自由も、すべてを根こそぎに破壊しつくした」

球磨川さんの通っていたいくつかの学校の名を答えてやると、綾瀬の顔が見る見るうちに曇っていった。それらは、どれも日本有数の名門校でありながら、ここ数年の内に廃校となっていたのだから。その有様は、マスコミどころか噂ですら流れないほどに悲惨なものだったという。

「……これ、ですよね」

綾瀬が携帯電話から開いた画面には、廃墟としか言いようのない風景が映っていた。そこはかつて球磨川さんの通っていた高校のひとつ。どんな異常な出来事が起こればそうなるのかというほどに、荒れ果てて朽ち果てた校舎の姿であった。

「やっぱり球磨川さんは凄いやな。本当に憧れるぜ」

「ち、千雨さん……」

その画像を見て、私は晴れ晴れとした表情で明るい声を漏らす。さすがは球磨川さん。私程度では到底真似のできない最低な行^{マインナス}為だ。しかし、そんな陶酔した表情を浮かべる私に、三人は得体の知れない何かを見るような視線を向けていた。

「そうだ。せっかく素敵な写真見せてもらったことだし、お返しに球磨川さんの写真見せてやるよ。携帯に保存してるからちよつと待ってな」

パカリと携帯を開いて待ち受け画面を見せてやる。そこには、パジャマ姿の男子高校生が写っていた。黒髪黒眼、中肉中背の一般的な男子である。むしろ童顔で年の割にはかわいらしい容姿といえるかもしれない。それを見た三人は拍子抜けしたように安堵の息を吐いた。もしかしたら、悪魔のような恐ろしい男を想像していたのかもしれない。ま、私にはこの映像からでも、球磨川さんの埒外なまでの不気味さや気持ち悪さを感じることができるんだけど。しかし、綾瀬が何かに気付いた風に疑問の声とともに首を傾げた。

「あれ？この写真、おかしくないですか？」

「夕映、おかしいって？」

「いえ、この写真の角度というか……。格好もそうですし……」

それを聞いて私には綾瀬の疑問に気が付いた。ポンと自分の手を叩く。

「ああ、それは隠しカメラの映像だからだよ」

「え？」

「だからカメラ目線でもないし、私室でのパジャマ姿なんだよ。さすがにヌード写真は、私だけの秘蔵品だから見せられないけどな」

球磨川さんの風呂に入るときの映像とかマジで最高。垂涎モノの一品だぜ。そう、球磨川さんの部屋にはいくつもの隠しカメラが仕掛けてある。当然、盗聴器も仕掛けてあるので、部屋での背筋の凍えるような気持ち悪い声もしっかり録音済みなのだ。そこまで話したところで、三人の顔は未知の化物にでも直面したかのように引き攣った。

「ほら、こういうの作ったりとかな」

『千雨ちゃん、最高に、かわいいよ』

盗聴した音声を加工して作成したファイルを再生する。何度聞いても心がときめいてしまった。私の顔は真っ赤に上気し、うっとりとした表情が緩んでしまう。この発想を思いついたとき、私は自画自賛してはしゃいだものだ。おかげで毎日球磨川さんの声を聞いて過ごせるんだから。

「ス、ストーカー……」

青ざめた顔で震えた声を漏らす早乙女。

「ストーカー？それを恋に生きる一途な女、という意味で言っているのならその通りだな」

「……その行為から一途な恋を連想するのは、本物のストーカーだ
けなのです」

「ひどいこと言うなよ、綾瀬。私は球磨川さんに迷惑なんて掛けて
ないぜ。それどころか、私の存在を一切知られないようにしてるし。
だって、球磨川さんとの再会は運命的に決まってるんだから——」

かつて約束した球磨川さんとの再会。それは、やっぱり運命的であ
ってほしいというのが乙女心である。球磨川さんの方から会いに来
て欲しいというのもある。

「宮崎なら分かるんじゃないか？」

「え……そ、そんな……」

同じく恋する乙女である宮崎になら私の気持ちが一——

いびつに歪んだ口元に笑みを浮かべ、瞳を覗き込むように顔を寄せ
る。恋をしているなら理解できるはずじゃないか。しかし、宮崎の
瞳には醜悪な怪物を目の当たりにしたような恐怖に怯えだけが写っ
ていた。

「わ、私の想いはそんなのじゃ……」

「本当に？」

「ひっ……いい、嫌……」

蛇に睨まれたかのように身を竦め、恐怖に息を呑んだ。隣にいる綾
瀬と早乙女も完全に負の感情に呑み込まれてしまう。それを救った

のはポンと宮崎の肩に置かれた掌だった。

「ほら、もうすぐ試合が終わるネ。応援してあげるよろし」

「超…さん……」

はっとした様子で我に帰る宮崎。その顔は死人のように青ざめ、憔悴しきっていた。他の二人も似たような有様だ。どうやら怖がらせてしまったらしい。自身のマイナス性を抑え、元の空気に戻す。冷え切った周囲の温度が一気に上がったように感じただろう。三人は私から離れるように立ち上がり、ドッジボールの応援に戻っていた。そして、この場には超と二人だけが残される。

「あんなに過^{マイナス}負荷を撒き散らして、クラスメイトを恐がらせるのは関心しないヨ」

「いや、恐がらせるつもりはなかったんだが……。恋について語ってたら熱くなっちまってな」

「ひどい寒気と吐き気を催したネ。死体^{モルグ}安置所にでもぶち込まれたかと思たヨ」

やれやれと超は困ったように肩を竦めた。そして、小さくつぶやく。

「これが過^{マイナス}負荷——やはり、私の目的には関わって欲しくない人種のようなネ」

そんなことを話している間に、ドッジボールの試合は決着がついた

ようだ。勝者は私達2－A。最後にネギが派手に魔法をぶっ放して
たみたいだが、それは見てみぬ振りをしておこう。

3時間目「――それが貴様の『事故申告（リップ・ザ・リップ）』」

――あれから様々なことがありつつも、私は無事に三年生へと進級していた。

成績については……ま、学年の平均くらい。三学期の期末試験はネギの課題のために勉強合宿があったので、テスト勉強も結構やったし。そして、クラスの成績を学年トップにするという課題を達成したネギは、今年から私達のクラスの正式な担任となったのだった。

そして、新学期初日――昏睡した佐々木まき絵が桜通りで発見された。

気を失っているだけで命に別状は無いそうだが、校内では桜通りの吸血鬼の仕業だと騒がれていた。佐々木その他にも襲われた生徒がいるらしい。情報の流れに意図的なものを感じた。

その日の放課後、私は桜通りで待っていた。空が薄暗くなり、街灯に電気が点き始める時刻。生徒達はほとんどが寮へと帰ったのだろうか。街灯の鉄柱に寄り掛かりながら、私はただその場に佇んでいた。待っている相手はもちろん――桜通りの吸血鬼。

「――来たか」

隠れている気配を感じて振り返ると、そこには身体をすっぽりと覆

うほどのサイズのローブに身を包んだ人影があった。影になってその顔を見ることは出来ない。しかし、それが私の待ち人であると理解できた。

「待ってたよ。桜通りの吸血鬼さん」

「ほう……気付いていたか。私に何の用だ？と言っても決まっているか。私を止めに来たのか」

その小柄な人物からは少女のようなかわいらしい声が発せられた。ローブで表情を隠しながらも、その口元が薄く笑みを浮かべているのが分かる。

「とりあえず、そのフード取ってくれよ。何か話しづらい。そうだろう？——マクダウエル」

「そのくらいは知っていたか、長谷川千雨」

フードを外すと、黄金のような長くきれいな金髪が風に揺れた。美しい金色が闇夜に映える。そこには見慣れた顔があった。クラスメイトのエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。小学生にも見紛うほどの体躯の少女は、その実、封印されし伝説の吸血鬼であった。

「私の吸血行為を止めに来たか。貴様がクラスメイトを心配するような殊勝な心を持っていたというのは意外だが……。しかし、悪の魔法使いたる私の前に立つとは無謀な——」

「おい、ちょっと待て！私はあるたの邪魔をしに来た訳じゃない」

「ならば、どうして私を待ち伏せていた」

鋭い瞳で睨みつけてくるマクダウエルに両手を振って敵意がないことを示す。私は吸血鬼退治をするために待っていた訳じゃない。むしろ逆だ。正面の吸血鬼は懷から試験管らしき物を取り出した姿勢で動きを止めていた。私の口元が吊り上がり歪んだ笑みが浮かぶ。

「――私の血を吸わせてやろうと思ってな」

驚愕に目を見開くマクダウエル。自身の制服のタイを緩めて首元を露出する。訝しげにこちらを見つめてくるのを感じるも、私は気にせずに歩み寄っていく。

「それに『悪の魔法使い』？何を言ってるんだ。あんたは何も悪くなんてない」

マクダウエルとの距離が一步步縮んでいく。その顔には苦虫を噛み潰したような表情が張り付いていた。汚物を見るような目で気持ち悪そうに唇を噛んでいる。

「だって、――恋のための行動に間違いなんてないんだから」

「……何を言っている」

「好きなんだろ？その、ナギ・スプリングフィールドって男が……」

「なっ、何を言っている！貴様！なぜ私があんなやつのこと！」

その言葉に急激に顔を赤くしたマクダウエル。あわあわと狼狽したように両手を振って叫ぶ。それはスキルなどなくとも凶星だとわかる有様だった。しかし、すぐにスツと表情が鋭く冷たいものに変わ

る。

「なぜ、貴様がそれを知っている」

「どうしてって、見れば分かるとしか言えないな」

はぐらかす私の返答に、しかし、マクダウェルは得心したように頷いた。

「そうか……いや、なるほど。——それが貴様の『事故申告』リップ・ザ・リップ」

「へえ、知ってたのか。私の過負荷を——」マイナス

私のような強さの欠片もない人間のことを、最強種である真祖の吸血鬼が知っていたというのは多少意外なことだった。力を封印された今の状態ですら、私など歯牙にかけないほどの実力を持っているんだし。いや、そもそも私は戦闘スキルなんて持ち合わせてないんだけどな。そう、私のスキルは彼女の言うとおりだ。

——『事故申告』リップ・ザ・リップ

その過負荷マイナスの効果は——『他人の隠し事を暴くこと』

私の前ではすべての隠し事は意味を成さない。心の中に秘めた恋心も、破滅をもたらす犯罪の証拠も関係なく、そのことごとくを暴いてしまうのだ。

「三年振りか……。嫌なことを思い出させてくれる。やはり、あの男を野放しにしておくべきではなかったか……」

マクダウエルは唾棄するように言い捨てる。心底忌々しそうな口振りに、言いようのない負の感情が込められていた。

「球磨川禊とか言ったか……。あの男を学園に入れるべきではなかった。そのせいで、貴様のような人間が生まれてしまったのだから」

「球磨川さんを知ってるのか!？」

「あの男が学園に侵入したのが三年前。そして、まともな人間ではないことを一目で理解させられた。ジジイも同じ判断をした。当然だろう。人間とはあれほどまでにおぞましくなれるのかと思ったよ。本当の意味で私が戦慄したのは何百年前だったか……。その感覚を一瞬にして思い出させられた。関わることすらしたくないと思ったのは初めてだったよ。世界中からありとあらゆる負の要素をかき集めて凝縮したような存在だった」

球磨川さんへの賛辞の言葉に私は嬉しさを隠しきれない。どうしても、だらしなく表情が緩んでしまう。そんな私に顔をしかめながら、マクダウエルは昔話を続けていく。私の運命を変えた三年前の出来事を――

「当時、ジジイは球磨川禊の学園都市への侵入を阻止しようとした。そのメンバーの中には警備員を任されている私もいた。総動員された学園の魔法使い連中。その戦力はこの旧世界でも屈指のものだったろう。だが、結果的に球磨川禊は、好き勝手に学校見学をして帰っていっただけだった」

薄気味悪そうに吐き捨てる。その顔にはおぞましさや薄気味悪さがまざまざと浮かんでいた。

「私達の警備の隙を縫うようにして、悠々と学園の敷地内を闊歩していた。魔法も気も使えない中学生に、当時の学園都市はしっちゃんめっちゃかにされたのだ。そして、その学校見学ツアーの最後にあの男が出会ったのが貴様だ」

警戒と戦慄を込めて指し示したのは私だった。

「会話の内容は聞き取れなかったが、それ以来、学園都市内での貴様の行動には注意を払っていた」

「それはご苦勞なことだな」

「そして、——貴様がWEB上に作ったサイトのことかな」

その瞬間、マクダウエルから受ける威圧が強くなった。重苦しく今にも押し潰されそうな空気。捕食者が天敵に会ったかのような危機感。冷たく暗い敵意が突き刺さる。一体なぜそんなに怒っているんだ？ただ、球磨川さんを見習っただけなのに。

「サイト名『^{リップ・ザ・リップ}事故申告』。ま、私の過負荷^{マイナス}の名前なんだけどな。それがどうかしたのか？ただの情報サイトだぜ」

「ただの？笑わせてくれる。あれが情報サイトなんて有意義なものか」

「ま、それは仕方ないさ。私の作るサイトが有意義^{プラス}なはずないだろ」
私が開設したのは負の情報を集めたサイト。動機は球磨川さんへのリスpektだ。結果的にそのサイトは爆発的な大成功を収めた。いや、大失敗を収めたというべきか。

「『結界中学』、『檻舎第二中学』、『酒甕中学』……。知っているだろう？——貴様が廃校にしてきた学校だ」

「そうだな。この辺りでは割と有名な中学を狙ってみたんだ。で、それがどうしたんだ？」

その言葉にいつそう私への威圧感が高まった。偽悪的なことを言っても、中身は意外と人道的なようだ。別に関係ない中学校がどうなろうと構わないだろうに……。私としては、球磨川さんを真似ていくつかの中学を廃校にしてみようという、ただの興味本位のものだ。おかげで過負荷^{マイナス}の使用法がよく分かったので、その点では有意義だった。

「真実は劇薬ってのは本当だったみたいだな。隠された心の中身をネット上にぶちまけてやっただけで、あんなひどい有様になるなんてさ」

私がやったのは単純なことだ。まず、休日を利用して標的となる中学校を回る。全校生徒を探して近付き、隠された秘密を奪い去っていく。そして、その秘密をネット上の私のサイトに本名を添えてすべて暴露するのだ。早朝の中学に忍び込み、すべての教室の黒板にペンキでホームページのアドレスを書いておけば、すぐに崩壊が始まる。

友人しか知らないことが次々とサイトに書き込まれているのだ。それも、後ろ暗いことばかり。疑心暗鬼が広がっていくのは当然の帰結である。これが第一段階。醜い犯人探しが始まり、心の底では誰も信じられなくなる。

次の段階として、本人しか知らない出来事を書き込んでいく。全校生徒の後ろ暗い情報を暴露するのだ。誰しもがひとつくらいは、他人に知られたら破滅だという秘密を抱えているもの。この段階でサイトの情報の精度の高さを実感する。ここに書かれていることは全て事実だと確信させられるのだ。自分の情報が正しいのだから、当然他人の情報も正しいと思うはず。リークではなく、超常的な何かによる悪意だと気付くだろう。しかし、もはや疑心暗鬼を繰り返した彼らに再び団結などできるはずもない。信頼し合うこともできず、サイトを見るのをやめることもできない。誰もが他人の秘密は知りたいのだ。全校生徒がすべての悪い秘密を晒されることになる。

そして、最終段階。学校全体に恐怖と不安が覆っている。サイトに書き込まれる情報を戦々恐々しながら覗く日々。すでにクラスメイトからの視線には、自身への糾弾と軽蔑しか感じられないほどに疑心が根付いてしまっている。そこで最後の一押し。嘘を混ぜるのだ。例えば、相田と飯田と上田が、同級生の女子の小田を卒業までに輪姦しようと計画しているとか。いじめられっこの岡田が自分をいじめていた菊田を殺害しようとしているとか。本人が否定しようとする誰にも信じてない。もはや、私の情報を疑うことは出来ないのだ。サイトに書かれた情報は共通認識として真実にされる。予告された被害者は恐怖するだろう。その恐怖は容易に殺意へと転換する。

——学園は地獄絵図と化した。

「ま、そんな感じだ。一番上手くできた学校で確か……生徒と教師合わせて半数以上が病院送りになったかな。死人の数は覚えてないが」

「貴様……！」

「整合性や力関係を考慮するのがコツだな。慣れてくれば情報だけで人は操れる」

楽しそうに自慢話を語る私を憎々しげな表情で睨みつけている。いや、これは私に非があるか。他人の自慢話なんて退屈なだけだから。心の中で反省の言葉をつぶやきながら、マクダウエル目の前にひざまずく。抱き締めるように首元を彼女へと近付けた。

「ま、いいや。それよりほら、血を吸えよ。必要なんだろ？」

「……それで貴様に何のメリットがある」

疑っているようで、マクダウエルはなかなか口を付けない。不気味な雰囲気に見えてしまったのか。しかし、誓って言うが私に他意なんて無い。純粹に彼女の恋を応援しているだけなのだ。

「恋に生きる女はすべて私の同類だ。仲間の恋路を応援するのは当然だろう？ 悲恋にしちゃうこともあるけど、それでも恋には違いない」

「……狂人め。それだけの数の人間を地獄に落としておいてよく言う。しかし、魔法的・呪術的な仕掛けも感じられない。罠ではないか……」

「だから、言ってるじゃねーか。私はあんたの手助けをしたいだけだって。それに、あんただって心の底では、関係ない他人から血を吸うのに罪悪感を覚えているんだし」

しばらく考えたのち、吸血鬼は私の首元に牙を突き立てた。その顔は苦渋に歪んでいる。勢いよく血が減少していく感覚。次第に私の意識は遠くなり、視界が黒に覆われるのだった。

4時間目「ちゃんと私を助けてくださいね？」

――麻帆良大停電の当日。電灯の明かりが消え去り、辺りは闇に包まれている。今夜こそがマクダウエルとネギの決戦であった。そして、私はマクダウエルからある仕事を任されている。

「よ、ネギ先生。準備はOKかい？じゃ、マクダウエルの元へと案内するぜ」

「ま、待ってください！どうして長谷川さんが！？」

「あん？決まってるだろ。私はマクダウエル側の人間だからだよ。いいから来いって。停電はいつまでも続くもんじゃねーんだからよ」

困惑するネギを連れて夜の街道を進んでいく。学園全域に渡って電気の供給が停止しているため、外には人の姿は無い。私とネギの二人だけがマクダウエルの待つ場所へと向かって歩いていった。といっても、それほど距離がある訳でもない。案内なんて面倒な手順を踏むのには大した理由はない。自分からネギの元へ赴くのは吸血鬼としてのプライドが許さないらしいというだけだ。弱者の方が挑んでくるべき、だとか。とはいえ、待ちに待った全力を出せる決戦だ。おそらく今か今かと待ちわびていることだろう。しかし、指定された場所まであと数百メートルという地点で、私は足を止めた。そのまま振り向かず、ネギに声を掛ける。

「なあ、私が命令されてんのは、あんたをマクダウエルの待つ地点まで案内することだ。その場所はこの先を突き当たり右に行ったところになる」

「え？は、はい。わかりました。あとは僕だけでという訳ですね」

「いいや、違う」

私を置いて先へ進もうとするネギの腕を掴む。不思議そうな顔をするネギに言葉を続ける。

「あんたの記憶から考えると、ナギとやらはまだ生きてるんだろ？マクダウエルの変を成就させるためにはあんたの血が必要だ。学園を出るためにもな」

「でも僕は！」

「マクダウエルはあんたとの決闘で勝負を着けるつもりだ。けどさ、その前に――」

私の口元に薄気味悪い笑みが浮かぶ。さりげなく右手を自分のポケットへと潜らせた。

「――あんたの腕一本くらいは貰ったこうと思ってさ」

右手に握ったナイフを突き出した。月明かりを反射して白刃が闇夜に踊る。虚を突かれたネギは呆然とした表情を浮かべたままだ。完璧な奇襲。

――喰らえ！

「危ねえ！旦那！」

しかし、その奇襲はどこから聞こえた叫び声によって失敗に終わ

ってしまった。無難に肩を狙ったのが悪かったのか。反射的に身体を捻ったネギに間一髪で回避されてしまう。奇襲を感知した存在はというと、ネギの肩に座っていたマスコットのオコジョだった。そのネギの顔には驚愕と恐怖の感情が浮かび上がっている。

「だがっ！」

避けたはいいが、ネギの体勢は大きく崩れている。手首を回し、返す刀でネギの二の腕を切り裂こうとナイフを振るった。無防備な身体に一刺しできると思ったが、しかし、それは魔法使いというものを甘く見過ぎだった。

フランス
バリエース・アエリアーリス
「風花……風障壁！」

「ぐっ……」

呪文と共にネギの前方に生じた風の塊が、あっさりと私の斬撃を弾き返す。逆に自分の腕を後方に吹っ飛ばされた私の体勢が崩れてしまう。

「旦那！今だ！やっちまえ！」

「で、でも……」

「じゃあ拘束魔法でもいいから！早く！」

再び呪文を唱え始めるネギ。崩れた体勢を立て直し、ネギへ向かって突撃を掛ける。呪文詠唱前に届くか……？

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル……」

「はあっ！」

フランス・エクサルマティオー
「風花武装解除！」

わずかに私の方が遅い。呪文詠唱が完了した瞬間、私の全身が木っ端微塵に破裂した。いや、それは私の勘違いで、着ていた衣服と手にしていたナイフが弾け飛んでしまっていた。衣服がバラバラに千切れ、風に流される。全裸に剥かれた私に戦闘を続けることはできなかった。やれやれと溜息を吐いて両手を挙げる。

「降参だ、降参。これ以上はただの無駄死にだ。さっさと先に行けよ」

「え？あの……服……」

野外で全裸のまま両手を挙げている私に、ネギは顔を赤くしてあわあわと慌てていた。裸の女子を外に放り出していくことに危険を覚えているのだろうか。だけど、別に私にとっては慣れたものだ。この程度で屈辱を感じるほど幸せな人生を送ってない。

それにしても、格闘経験すらない小学生に襲い掛かって傷ひとつ負わせられないとは……。さすがに自分の不甲斐なさに反省せざるを得ない。

「停電が終わっちまうだろうが。さっさと行ってくれないと困るんだが」

「でも……そんな格好のままで」

ネギが急いで自分のローブを脱ごうとするが、ハッと気付いたようにその動作をやめた。そのローブの内側には、今回の決戦のために買い揃えた魔法道具が詰め込まれていたからだ。いいから、先に行けと言おうとしたとき、私の頭上からヒラヒラと黒い布が降ってきた。

「どうも遅いと思ったら、やはり余計な真似をしていたか。くだらん横槍を入れるなど言っただろうが」

「エヴァンジェリンさん!？」

私の頭上には宙空に佇んでいるマクダウエルがいた。黒衣に包まれ、その圧倒的な風格はまさに人間の上位種族というに相応しい。そして、私は降ってきた黒衣のローブを身体に巻きつけて裸身を隠す。

「長谷川千雨。貴様はもう決闘には関わるな。あとは追っ手や邪魔者が来た場合に足止めをするだけでいい」

「わかった」

マクダウエルの言葉に首肯し、この周辺に隠された気配を探知する。そして、私から注意を外したマクダウエルは、愉しそうにネギへと目を向けた。ネギも決意を込めた瞳で目の前の絶対者を見つめ返す。

「さて、ようやく待ち望んだ機会が訪れたか。ククッ……始めようか」

「はい! 行きます!」

その言葉と同時にネギは杖にまたがり、闇夜の空へと高速で飛び上がった。そのまま距離を取るように後方へと飛翔する。

「ほう、何か考えがあるようだな。乗ってやろう」

逃げるネギを追って空中を疾駆するマクダウエル。二人は学園内の空中戦に突入した。すぐに私の視界内から消え去ってしまう。その高速戦闘を見物したいところだったが、私にはその様子を眺めることはできそうもない。なぜなら――

「来たか、神楽坂」

「え？千雨ちゃん？」

走ってきた神楽坂がこの場に現れたからだ。神楽坂明日菜がネギと契約したことはすでに掴んでいる。正確には仮契約らしいが……。ちなみに、仮契約とは魔法使いの従者となる契約のことで、魔力による身体強化や固有のアーティファクトを得られるなどの様々な利点がある。しかし、今のところは身体強化を行っていない素の状態のようだ。

「どうして千雨ちゃんが……。もしかしてエヴァちゃんの仲間なの！？」

「そういうことだ。あと、二人はもういないぜ。どっかに飛んで行っちゃった」

ときおり夜空に光点が見えるので、大体の居場所は分かるけどな。しかし、私の仕事はここで神楽坂を足止めすることだ。落ちていたナイフを拾い、冷静に彼我の戦力差を測る。

こちらは、何の格闘経験もない子供にあっさりとナイフを避けられた運動不足の女子。もう一方は運動神経抜群の元氣娘。子供の喧嘩とはいえ、殴り合いの経験も豊富だ。武器有りのハンデ戦だけど、戦力差は……

「とりあえず仕掛けてみるか」

軽い調子でつぶやくと、神楽坂の懐へと飛び込み、ナイフで胴を薙ぎ払った。

「きゃっ！千雨ちゃん！危ないって！」

「チッ……」

首、心臓、太股、手首。続けざまに斬りつけていく私だったが、それを後ろに下がりながら全て回避されてしまう。完全に見切られている。やはり武器有りでも戦闘力は相手の方が勝っていた。

「危ないって言ってんでしょ！」

「ごふっ……」

堪忍袋の緒が切れたのか、神楽坂が大声で叫びながら放った蹴りが私の腹に突き刺さった。一瞬、息が止まる。あまりの威力に肺の中の空気が強制的に吐き出された。蹴り飛ばされた私は、そのまま地面をゴロゴロと転がっていく。とても素人とは思えない威力。腹に鈍い痛みが走る。しかし、私は何事も無かったようにあっさりと立ち上がった。痛みなんて私にとっては隣人にすぎない。ましてや殴られたり蹴られたりなんて、かつては日常の出来事だったのだ。し

かし、神楽坂は立ち上がった私を心配そうな目で見つめていた。

「あ、ごめんね。つい思いっきり蹴っちゃった」

「いや、いいぜ。痛くもかゆくもないさ」

すまなそうに謝る神楽坂に、平静を装ったまま軽く言葉を返す。

「そう、じゃあいけど。千雨ちゃんも魔法使って奴なの？」

「いいや。だけど、遠慮はしないでいいぜ。全力で来いよ」

まるで苦痛を感じさせない表情に、私が何らかの不思議な力で身を守ったのだと信じたのだろう。ほっとした風に息を吐いた。さすがに一般人である神楽坂は、他人を全力で攻撃することなんてめったに無い。しかし、私が魔法っぽい力を持つ超人だと思っているいま、次の一撃は本当の全力で来るはず。それが私の狙いだった。

「いっくわよおー！」

私に向かって走ってくる神楽坂。それに対して私は腰を落とし、両腕をだらりと下へ降ろした。無防備な顔面。そこへ向かって神楽坂は全力の跳び蹴りを放つ。肉食獣のようなバネのあるしなやかな動作。

——速い

目の前に靴の踵が迫ってくる。相当な威力を予感させる蹴りだった。このタイミングでは回避することもできない。しかし、そもそも私には回避するつもりなんてなかった。私の目的は神楽坂をネギの元

へと向かわせないこと。そのためには、必ずしも勝利する必要なんてないのだ。特に、過^{マイナス}負荷の私にとっては敗北こそが日常。負け方については知り尽くしている。私は眼前に迫る靴の裏を前にして――

――自分の顔面を前に突き出した

「えっ？」

神楽坂の口から声が漏れる。強烈な蹴りをモロに受けて勢いよく吹き飛ぶ私の身体。グチャリと自分の顔面から鈍い音が響く。わざとカウンターで喰らった渾身の跳び蹴りは、私の顔面に相当の被害を与えていた。想像以上の手ごたえならぬ足ごたえに、神楽坂が驚きの表情を浮かべているのが視界に映る。

「うぐううう……ひどい。ひどすぎるぜ、神楽坂あ」

倒れた状態からよろよろと立ち上がる。ぐにやりと気持ち悪い動きで上体に戻していく。その幽鬼のような雰囲気^{アトモスフィア}に神楽坂の血の気が引く。

眼鏡のレンズは割れ、フレームも半ばからへし折れていた。そして、私の鼻骨は折れ、潰れた鼻からはドボドボと血が流れ出る。怪我を大きく見せるためにあえて出しておいた舌も半ばから噛み切られ、大量の血液が口元からゴポリと溢れ出している。自分で言うのも何だが、端正な顔がぐちゃぐちゃに潰れた顔は、普段とのギャップもあって見るに耐えない無惨なものとなっていた。

「痛い……痛いよ……どうして……」

「ひっ……！ご、ごめんなさい……」

「許さない。私の顔を、こんな滅茶苦茶に壊して」

恨みと憎しみの籠った瞳で神楽坂を下から覗き込む。目を背ける神楽坂に強制的に目を合わせてやる。その瞳は恐怖と嫌悪に染まっていた。隠された記憶はともかく、一般の世界に暮らしている現在の神楽坂にとっては暴力は禁忌である。大怪我を負って血塗れにも関わらず、平然と自分を見つめてくる負の存在に、神楽坂は得体の知れない暗黒を感じていた。

「あ……うあああ……」

全身に鳥肌が立ち、膝がガクガクと震えている。あまりにも不気味な存在に神楽坂の脳は真っ白になってしまっていた。しかし、それも無理からぬ話。私も過負荷マイナスと呼ばれるほどのマイナスな存在である。正面から向き合って、過負荷マイナスの気持ち悪さに耐えるというのは至難の業。歪みきった精神を目の当たりにした神楽坂の脳内には、すでにこの場から逃げ出したいという思考だけが渦巻いていた。

ただし、私にはここで逃がすつもりは無い。さらに、私はキスできるほどの距離にまで顔を近付けていく。神楽坂は怯えたようにビクリと身体を跳ねさせた。無理矢理にお互いの目と目を合わせて、私の醜悪で無様な姿を直視させてやる。神楽坂の瞳に映る私の姿は、我ながら腐敗しきった死体のように気持ち悪かった。もう少し。あと一步で神楽坂の戦意は粉々に碎かれるという確信があった。しかし、それは男の声によって遮られる。

「これ以上、彼女に手を出すのはやめてくれないか」

それと同時に、私の頭部が衝撃を受けて激しく揺さぶられた。思わずガクリと地面に膝を着いてしまう。脳がかき混ぜられた感覚に小さく呻く。

「ぐっ……これは」

気力で立ち上がろうとするも、その瞬間、さらに二度三度と衝撃が脳天に伝播させられた。身体の支配権を失った私は地面に倒れ伏す。ピクリとも動けずにうつ伏せのまま、神楽坂の逃亡を見逃すしかなかった。そして、神楽坂が去ったのを見計らって物陰から現れたのは、元担任教師の高畑。魔法世界では英雄と謳われる戦士である。当然、私のような貧弱な人間では勝負にすらならない。

「生徒に向かって、ずいぶんと非道いことするんですね」

「……立ち上がれるのか。そのまま寝ていなさい」

再び顎先に衝撃。結構距離が空いていたんだけど、高畑にとっては関係ないのだろう。それほどに実力に天と地ほどの差があった。今の攻撃も卵に触れるように優しく、壊れ物を扱うような力加減だったに違いない。的確な打撃により一撃で脳震盪を引き起こされた。しかし、それでも私は立ち上がる。執念とも怨念とも呼べるそれに、わずかに高畑の顔が歪んだ。

「女の子の顔をこんな無惨に破壊しちゃったんですよ？どうして加害者の神楽坂を庇うんです……。私だって同じ生徒じゃないですか。特別扱いされない生徒は泣き寝入りするしかないんですか？」

「……そうだね。明日菜くんに代わって謝るよ。すまない。君の怪

我については、僕達で責任もって治療させてもらう」

「高畑先生に謝られてもね。神楽坂を呼び戻してもらえませんか？」

「悪いが明日菜くんにはやってもらうことがあるんだ」

会話をしながら、高畑の隠し事を読み取っていく。そして、予想通りの結果に心の中で舌打ちをした。現在、マクダウエルとネギとの決闘は学園長の監視下に置かれているらしい。数人の魔法先生によって見られており、高畑もそこへ向かう途中であった。神楽坂も無事に合流し、すでに二対二の戦闘が行われている。

——だったら、高畑だけでも足止めしておくか

他の魔法先生はマクダウエルにとって物の数ではない。しかし、高畑だけは別格。マクダウエルが全盛期の力を維持できるのは、停電中という時間制限付きなのだ。こいつを向かわせてしまうと、さすがにマクダウエルの勝利は危うくなってしまう。戦闘スキルを有しない私が学園でもトップクラスの高畑を足止めする方法。それが一つだけある。

「女子中等部の保健室に行ってくれば、怪我を治せる先生がいるはずだから。エヴァに聞いたのか？とにかく、魔法についてはすでに知っているようだし、魔法先生に治療を頼んでくれ」

「そうですか。わざわざありがとうございます」

そう言いながら私は手にしていたナイフを逆手に持ち替える。その様子を視界に捉えていた高畑の緊張感がわずかに高まった。しかし、私が気も扱えない素人だというのも知っているし、距離が空いてい

るのもあって、特に向こうから動きを見せる様子は無さそうだ。襲い掛かっても容易に無力化できるという確信からだろう。そして、それは私にとっては好都合だった。

「高畑先生って魔法使えないんですよね？」

「ん？ そうだよ」

「それはよかった」

――ズブリと自分の腹へとナイフを突き立てた。

直後、全身に走る激痛。さすがの高畑も予想外の出来事に一瞬、虚を突かれて動きが止まった。これは千載一遇の好機。呻き声を上げながらも、力を込めて腹に刺したその刃で左右にぐりぐりとかき混ぜる。内臓がぐちゅりと損傷する感触が手に残った。

「なっ！？ 何をしているんだ！」

私の目の前に瞬間移動した高畑が、ナイフを握っていた両手を振り払った。しかし、もう遅い。腹の中を蹂躪したナイフの根元からはどくどくと大量の血液が溢れ出している。私の足元には真っ赤な鮮血による水溜りができ、刻々とその面積が広がっていた。魔法の使えない高畑が応急処置をできる限度を超えている。それを確信した私は口元を吊り上げ、薄気味悪い笑みを浮かべた。

「ねえ、高畑先生。ちゃんと私を助けてくださいね？ まさか、教え子を見殺しになんてしませんよね？ 大丈夫です。人命救助のためな

んだから、マクダウエル元へ向かうのが遅れたって誰も咎めたり
しませんよ」

高畑の表情がゾツとしたように凍りついたのが、霞んでいく視界に
映った。『自分を保健室へと運ばせるため』。それだけのために、
私は自分の腹をナイフで刺し貫いたのだ。下手すれば死ぬかもしれない
ほどの重傷。内臓もいくつか裂けただろうし、出血多量でこの
瞬間にも死ぬかもしれない。しかし、そんなマイナス要素を恐れな
いのが私たち過負荷^{マイナス}なのだ。

そして、そこまでして成し遂げた高畑の足止めも虚しく、マクダウ
エルはネギに敗北したと知らされたのは、保健室のベッドで目を覚
ました翌日の昼過ぎのことであった。

5時間目「同性愛とか興味ある？」

この麻帆良学園中等部の修学旅行は四月に行われる。今年の行き先は京都。マクダウエルは例の呪いのせいで学園で留守番だが、それ以外は全員参加である。私としても、ひさしぶりの麻帆良の外なので楽しみにしていたのだが……

「きゃああああ！蛙がたくさんいるうー！」

電車の中で蛙が大量発生したり――

「ってこの水、お酒じゃないのよー！」

清水寺の水がアルコールに変わっていて、生徒達が酔いつぶれたり

――

せつかくの外なのに非常識を持ち出すんじゃないよー！おかげで初日から騒がしさで疲れてしまった。こいつらのテンションの高さには慣れてるけど、今日は普段以上にはしゃいでるからな……。そして、その夜にはネギと明日菜に呼び出されていた。……厄介事の予感しかしない。

「ということで、千雨さん！僕に協力してくれませんか？」

人気の無いロビーでネギから聞かされたのは、この修学旅行を妨害している者の存在についてだ。相手は関西呪術協会の手の者で、どうやらネギの持っている関東魔法協会からの親書を奪おうとしているらしい。その話をおおげさに驚いた振りをしながら聞いていた。ま、すでに知ってた内容だし。

来る途中の新幹線の中に、素性を隠した女がいたから調べてみたら、そいつが妨害を仕掛けている張本人だったのだ。狙いが私じゃなかったから放っておいたが……

「ちょっとネギ！本当に千雨ちゃんを仲間に入れるつもりなの？やめた方がいいと思うわよ」

「大丈夫だって！何たってあのエヴァンジェリンが仲間に使っていた奴だぜ！こっちの戦力も二人だけじゃ足りねえしよ」

「そうだよ。魔法のことを知ってる人なんて、クラスで他には千雨さんだけだし」

ネギの耳元に小声で囁く神楽坂。その固い表情に気付くことなく、オコジョとネギが賛成の言葉を示していた。過負荷相手には神楽坂の言うことが正しい。二人が楽観的なのは、私と接した時間と密度が少ないからだろう。そして、私の選択はもちろん決まっている。

「それで、どうですか？千雨さん」

「ああ、いいぜ」

「本当ですか！？ありがとうございます！」

嬉しそうな声で大きくお辞儀をするネギ。

「それで譲ちゃん。戦闘力はどれくらいなんだい？以前の戦いを見た限りじゃあ、あまり強くはなさそうだけだよ。よければ兄貴と仮契約してくんねえか？」

「仮契約ってキスのことか？断固拒否に決まってるだろ。たしかに私は一切の戦闘スキルを有していないが、非戦闘スキルに関しては劣等感があるんでな。直接戦闘以外でなら役に立てると思うぜ」

「たしかに全然弱かったもんね。……ナイフは怖かったけど」

私の返答に呆れたように神楽坂が笑う。しかし、その笑みは自身のトラウマを隠そうと少し引き攣ったものだった。

「それで、私たちは関西呪術協会とやらの刺客を倒せばいいんだな？」

「はい。千雨さんには、今日みたいに妨害があつたときに、クラスの生徒達のことを頼みたいんです。僕と明日菜さんで襲ってきた敵の相手をしますから」

真剣な表情で決意を固めるように拳を握るネギ。すでに私が敵の情報をもっていることは黙っておく。この事件について、私がどういった立場を取るかが自分の中で明確には決まっていないからだ。相手の目的はネギの親書とはわずかにズレていることだし。

「だがよ、兄貴。敵は内部にもいるのかもしれないぜ。ほら、桜咲刹那って言ったろ？電車の中で怪しい動きをしてたやつ」

そこで、ネギの肩の上でオコジョが面白いことを言い始めた。これだ、と直感した私は自身の口元に薄く笑みを浮かべた。あとは情報の断片をどうやって組み合わせさせて嵌め込むか……。

「たしかに危険そうだな。これ見よがしに武器なんて持ち込んでる

し。修学旅行に刀を持ってくる必要なんて無いだろ？」

「で、でも……桜咲さんは剣道部ですし……それで」

「他のクラスにも剣道部は何人かいるけど、他に刀を持っている奴なんていないぜ。これは、いざというときにあんたを襲うためじゃないのか？」

自分の生徒を疑いたくないのか、消極的な意見を出すネギにすぐさま反論する。そして、予想通りにオコジョは私の意見に乗ってきた。

「そうだぜ！ やっぱりあの桜咲って女は敵のスパイだったに違いねえ！ さっさと囲んで倒しちまおうぜ！」

「いや、それはやめた方がいい」

積極的な意見を出すオコジョだが、それをされては私の方が困る。議論の方向性を修正しておこう。

「桜咲の実力は未知数なんだろう？ 私は戦闘には使えないし、二人だけで確実に勝てる相手なのか？ もしかしたら任務はあんたらの監視だけなのかもしれないし。戦力が二人しかない以上、避けられる戦闘は避けるべきだ」

「だけだよ、野放しにしておいて肝心な場面で邪魔されちゃたまんねえぜ」

「分かってる。だけど、偶然にも桜咲とは同じ班だ。明日から私があいつの動きを監視しておいて、何かあったら連絡する。それでどうだ？」

「……嬢ちゃんの案が無難そうだな。実際に妨害行為を行ってるのは外部の連中だし。兄貴たちはそっちに集中した方がいいか」

その作戦案にネギと明日菜も揃って頷いた。二人とも明日からの指針が決まって安堵したような表情を浮かべている。当面は私が桜咲の監視、ネギと明日菜が外部からの妨害への対応ということになった。これで二人を桜咲から引き離すことに成功。内心で予定調和にほくそ笑みながら、今夜は二人と別れたのだった。

しばらく旅館の中を散策していた私は、目的の人物を見つけ、薄笑いを浮かべる。それは、客室の通路を掃除用具を手に歩いている女性だった。一見すると、ただの従業員だが、私には彼女が別の目的でこの場にいることが分かる。

「コソコソと変装して素性を隠して、目的を隠して……。それは私の過負荷^{マイナス}にとっては完全に逆効果だぜ」

相手に聞こえないように、小声で嘲るように言い放つ。隠し事とは、つまりは負い目や弱み。この過負荷^{マイナス}は、それらのことごとくを感知して看破できるのだ。誰にも知られてはならない計画なのだろう。その気持ちは、私にとってはマイナスに作用する。やはり、新幹線の中で妨害行為を仕掛けていた女と同一人物だ。あとは、これらの情報をどうやって当てはめていくか……。この場を去っていく私の顔には、気持ち悪い笑みを浮かんでいた。

旅館の部屋の一室を訪れた私は、入浴の準備をしていた桜咲に声を掛けた。

「よ、桜咲。ちょっといいか？明日の班行動のことで話があるんだが……」

「はい。大丈夫ですよ」

「じゃあ、外で話そうぜ。部屋はちょっと騒がしいしな」

呼び出した桜咲連れ出して廊下をゆっくりと歩いていく。しばらく歩いていると怪訝そうに尋ねてきた。

「あの、どこまで行くのですか？あまり遅くなると入浴の時間に間に合わなくなってしまうが」

「ああ、ちょっと人に聞かれない話だな。ええと……この辺でいいか」

そう言って、私は旅館の裏口の扉の前で進むのを止めた。疑問符を頭に浮かべた桜咲はじっと私の顔を見つめている。といっても、別に桜咲に話なんてない。ただ、この場に呼び出す口実として言っただけの口から出任せだ。しかし、そんなことを言えるはずもない。とりあえず、桜咲が喰い付きそうな話題と言えば……

「桜咲って同性愛とか興味ある？」

ぶふっと桜咲が吹き出した。慌てた様子で両手を正面でひらひらと振り回す。

「なになっ、何を言い出すんですか！？ま、まさか長谷川さんっ！」

「いやー、桜咲ってそっちの気があるのかなって思ってたさ。あ、いや別に否定してる訳じゃないぜ。恋愛であれば私はどんなものでも応援するつもりだし」

「ありませんよ！……はあ、どうしてそんな話が」

頭痛を抑えるように片手を額に当てて溜息を吐く桜咲。しかし、次の私の言葉によってさらに盛大に頭を抱えることになる。

「だって、いつも隠れて近衛のこと眺めてるじゃん」

「うええええっ！気付いてたんですか！？」

一度落ち着いた桜咲は再び大声で絶叫した。その狼狽振りには、普段の物静かな面影は微塵も残っていない。耳まで真っ赤にして恥ずかしそうに身体をよじっている。少しの間、私はその様子を楽しく観察していた。

そして、ようやく準備が整ったようだ。通りの向こう側から、こちらへ走ってくる人影が視界に映った。いや、それは人影というよりは猿の着ぐるみだったのだが……

「あれって近衛じゃねーか」

「え？お嬢様が！？」

私が指をさした先には、猿の着ぐるみに抱えられた近衛の姿があった。近衛は着ぐるみの腕の中で眠っているようだ。一心不乱に人間を抱えて走る姿は、何か切羽詰ったものを感じさせる。というか近衛が誘拐されていた。即座にそれを察知した桜咲が怒りの形相で刀の鞘に手を掛ける。そして、次の瞬間――

「貴様あああああ！」

――剣閃

瞬間移動したように猿の懷に潜り込んでいた桜咲。その日本刀による強烈な一撃が、すれちがい様に猿のきぐるみを斬り裂いていた。バタリとその場に倒れ伏す女。そして、桜咲の腕には近衛が抱かれている。

「うぐうう……何や、あんたは」

桜咲に受けたダメージでうずくまっていた女は、フラフラと足元のおぼつかない様子でこちらへ歩き出した。あの一撃を受けて立っていられるのは、身に纏っていた猿の着ぐるみのおかげだろう。しかし、その着ぐるみも先ほどの剣を受けて消え去っている。

「ぐっ……神鳴流の剣士が護衛についてたんかい。この場は引いて作戦立て直しや」

「貴様っ！逃がすか！」

激昂した桜咲は再び女へ斬り掛かろうと刀を握り締めた。しかし、

腕に抱えている近衛に気付き、それを一瞬躊躇ってしまった。そして、その隙に裏口から逃げようと私の元へと女が走ってくる。

「邪魔や！さっさと失せや！」

「うわっ……！」

扉の前にいた私がドンツと女に突き飛ばされた。強く押されてあっけなく床へと倒される。転倒した私を見て桜咲が心配そうに声を上げた。

「長谷川さん！」

「次こそは、近衛お嬢様の身柄を確保させて頂きますわ」

女は捨て台詞を残して裏口から逃げ出そうとする。しかし、握ったドアノブからはガチャリという硬い感触。

「なっ……ちゃんと鍵は開けておいたはず！？」

「貴様はここで仕留める！」

ガチャガチャと必死にドアノブを動かすも、扉は一向に開く気配は無い。それも当然。さっき私が逃げられないように扉に鍵を掛けておいたのだ。予定犯行時刻と逃走ルートを知っていれば、この場に桜咲を配置しておくだけで阻止できる。慌てて鍵を外そうとするが、桜咲相手にそんな時間の余裕はない。すでに桜咲は疾風のごとき速度で誘拐犯の元へと跳び掛っていた。

「ちっ……なら！お出でませ！猿鬼！熊鬼！……ってあれ？」

自身の内ポケットへと手を入れた女は、その顔を驚愕に歪ませた。

「探し物はこれかい？」

床に倒れながら、私は手に持った紙の束をひらひらと振ってみせる。それは、女の内ポケットに隠されていたお札の束。さっき押し倒されたとき、こっそりと手を伸ばして盗み取っていたのだ。注意が完全に桜咲に向いていたため、私は無警戒で相手の切り札を奪うことができた。失態を悟った誘拐犯は私を憎々しげに睨み付けるが、もはや札を取り戻すことはできない。なぜなら、目の前には日本刀を振り上げる桜咲の姿があったからだ。

「神鳴流奥義——百烈桜華斬！」

——桜吹雪のように吹き荒れる無数の斬撃に、女の全身から血飛沫が花弁のように舞い散った。

身体中を斬り刻まれ、血の海に沈んだ誘拐犯。しかし、どうやら息はあるようだ。近衛を床に寝かせた桜咲は、片手で握った鞘に刀を収める。そして、倒れている私に手を差し出した。

「大丈夫ですか？」

「ああ、ちょっと押されただけだよ」

桜咲の手に握まり、勢いよく立ち上がる。近衛は無事に取り返せたようだけど、この血達磨はどうしたもんか……

「お嬢様を救出を手伝ってくれてありがとうございます。それで長谷川さんは……ええと、魔法生徒なのですか？」

「いや、違うぜ。だけど魔法のことは知ってる。っと、それはともかく、この誘拐犯を連れて行ってくれよ。こんなの放置しておけないだろ？ 私の力じゃ運べないしな」

床に倒れた女を視界に入れると、得心したように桜咲が頷いた。真っ赤に染まった物体と血溜りは思いのほか目立っている。

「そうですね。彼女からお嬢様を狙った連中についての情報を引き出さないといけませんし」

「近衛のことは、起きるまで私がここにいるから安心しろよ。詳しい話はあとにしようぜ。人が来ると面倒だ」

「わかりました。では、お嬢様をよろしく願います」

シュッと消えるように桜咲と誘拐犯の姿が消え去った。それにしても、二人分の重量でこんな速く動けるのか。本当に同じ人間なのかと呆れてしまう。私には近衛を背負って運ぶほどの筋力も体力もないので、隣に座って起きるのを待つとしよう。とりあえず、血の跡だけは拭いておかないと……

「千雨ちゃん！ 大変なの！ このかが誘拐され……ってこのか!？」

「え？千雨さんが取り戻してくれたんですか？」

ドタドタと走ってきたのはネギと神楽坂。二人は私の隣に寝ている近衛を見つけてに驚きの声を上げた。どうやら近衛を追ってきたらしい。無事を確認した二人は安心したようにホッと息を吐き出した。

「千雨ちゃん、ありがと。でも、このかを誘拐したあの女はどうしたの？」

「ここらを散歩してたら、急に近衛を抱えて猿の着ぐるみが走ってきてな。何とか取り返したんだが、犯人の方は捕まえられなかったよ。悪いな」

「ううん！全然！このかを取り返せただけで十分よ」

「そうですね。でも、どうしてこのかさんを狙ったんでしょうか……」

ネギが考え込むように唸っている。それを横目に見ながら、私は展開が思い通りになっていることに一安心していた。

「あんたに対する牽制なのかもな。生徒が誘拐されたら修学旅行どころじゃないだろう？」

「そんな……だからって関係ない生徒達を巻き込むなんて！」

怒りに燃えるネギ。そこにもうひとつ火種を放り込んでやる。

「それと誘拐犯の女なんだが、実は桜咲が連れて行っちゃった」

「「ええっ!？」」

「たぶん二人は一緒に動いてるぞ」

いかにも桜咲が敵側の人間だと言う風に言葉を選んで話してやる。これでネギと桜咲が協調路線を取ることはないだろう。そして、これは桜咲のためなのだ。

彼女の望みは『近衛をあらゆる敵から守ること』。それは確かにその通りなのだろう。だが、その裏に隠された本音に私は気付いていた。

——このちゃんに感謝されたい。愛されたい。

その願いを私は応援する。ネギと神楽坂が近衛の護衛に回ってしまえば、戦力外の私を抜いたとしても人数は三人。感謝の度合いが三分の一に減ってしまうのだ。近衛の安全は桜咲だけで守らなければならぬ。安心しろよ、桜咲。

「お前の恋は、私が叶えてやるからさ」

6時間目「ただのしがない悪平等（ノットイコール）さ」

修学旅行二日目が無事に終了した。何事もなく旅館に戻った私と桜咲は、今後の打ち合わせのために人気の無い一室に集まっていた。

「今日は襲撃がなくて助かったな」

「ええ、昨日の女が首謀者だったようですから。おそらくは今後の方策を考えていたのでしょう。自身が不在でも計画は続くように命令してあるようですし。今夜辺りからは仕掛けてくる可能性があります。それにしても……」

ちらりと横を向いた桜咲の視線の先には、クラスメイトの朝倉和美がいた。それに気付いた彼女は軽く手を振って返す。朝倉は今回のために協力を要請した助っ人である。

「朝倉には、私と同じく索敵を担当してもらってる。今日も一日中、周囲に不審な目が無いか確認してくれてたんだぜ」

「そうですか。ありがとうございます。朝倉さんも魔法使いだったのですか？」

桜咲の質問に、いやいやと軽く手を振って答えた。

「魔法も気も使えない、ただの普通ノーマルな一般生徒だよ。ただのしがない悪平等ノットイコールさ」

「悪平等ノットイコール、ですか？」

「気にしなくていいよ。たぶん桜咲が関わることはないと思うしね」
そう言って笑う朝倉。その笑みは強者のような凄みもなく、弱者の
ような醜悪さもない、普通のものだった。

——ノットイコール悪平等、安心院なじみ

一京のスキルをもつ人外。朝倉は彼女の端末として、麻帆良学園の
調査を行っていた。今回の協力も、私のもっている麻帆良大停電時
の情報と引き換えの取引によるものだ。そんな私と朝倉との間には
一つだけ条件が結ばれている。互いの情報を誰にも流さないこと。
麻帆良は魔法使いのお膝元だ。魔法や気によらない能力者の存在は
秘匿しておきたい、というのは二人の共通認識であった。

「そういや桜咲のアドレス知らなかったな。教えてくれよ。別行動
してるときに襲撃掛けられると困るからな」

「わかりました。はい……どうぞ」

携帯電話を取り出し、赤外線で互いのアドレスを交換する。朝倉は
すでに知っているようなので、交換しないようだ。全校生徒のアド
レスを網羅していると噂の朝倉だ。学園の表の情報量については麻
帆良随一だろう。私の過負荷マイナスは隠し事という制約があるためか、周
知の情報には疎い面がある。そもそも、情報屋をやっているわけで
もないし、他人の情報なんてわざわざ調べたいとは思わないしな。

「それで、明日の予定は……」

「それより！ ちょっと千雨には私のイベントに付き合ってもらおうよ
！」

「ちょ、ちょっと待て。何だそれは？」

困惑する私を引っ張っていかうとする朝倉。嫌な予感しかしない。そのまま面白がるように満面の笑顔で口を開いた。

「『修学旅行でネギ先生とラブラブキス大作戦！』。千雨もエントリーしてあるから」

「ふざけんな！ガキに興味ねー、ってかそれ仮契約目的だろ！お前もあいつらと接触してたのかよ！」

「はいはい、いいから参加しなつて。修学旅行中は最大限に協力してやるからさ」

そのまま押し切られ、無理矢理参加させられたのだった。

朝倉の企画したイベント『修学旅行でネギ先生とラブラブキス大作戦！』とは、ネギの唇を奪うことを目的とした、誰が一番にネギとキスできるかという勝負である。イベントは旅館に仕掛けられた監視カメラによって中継されており、一位を予想して賭けまで行われるそうだ。

……あまりにもくだらないゲームだ。こんな企画に参加していると
思うだけで頭が痛くなってくるぜ。とはいえ、参加するからには一

位を狙う……はずもなく。開始と同時に、私は監視カメラの死角に潜り込み、呆れ交じりの溜息を吐きながら歩いていた。

「ネギ先生の唇はわたくしが頂きますわ!」

「ここは拙者が時間を稼ぐでござる。二人は先へ……」

遠くの方からドタバタと音が響いている。音源から離れるように、うろうろと旅館内をさまよっていた。

「ったく……騒がしいやつらだな。見回りの教師に見つかるじゃねーか」

こういうのは遠くから眺めてるだけで十分だったのに。館内に散らばっている教師たちの位置を感じ取り、それらを避けるように散歩を続けていく。しかし、その瞬間、周囲に異分子の反応がひとつ現れた。

「……ちっ、早くも来やがったか」

敵は一人、か……。即座に携帯を朝倉へと繋ぐ。

「朝倉! 敵だ! 正門から百メートルくらいの位置。堂々とこの旅館に近付いてきてる」

「了々解。正門なら人がいるね。ちょっと待ってて……見えたよ! 同調完了!」

「なら、桜咲に連絡を取って誘導してくれ。携帯いくつか持ってたろ? この電話は通話状態のままにしといてくれ」

「わかってるって。あんたはどうすんの？」

「私も行くからルート上の監視カメラは切っというて」

そう言って私は走り出した。私の過負荷、マイナス『事故申告』リップ・ザ・リップの発動には条件がある。周辺の違和感を読み取る程度ならまだしも、他人の思考や記憶を暴くには本人を一度視認する必要があるのだ。そのせいで、いまだに侵入者の容姿も目的もまったく不明という状態である。現在の状況を読み取るためにも、侵入者の元へ急がないと……

一京のスキルをもつ人外、安心院なじみ。三年前、朝倉は彼女から一つのスキルを借り受けていた。

——『パラサイトシーイング欲視力』

その効果は『他人の視界を乗っ取る』という荒唐無稽なものである。他人の視界を共有できるという方が正確か。すなわち、この旅館に存在する全ての人間が朝倉の『目』というわけだ。処理能力の問題もあるが、数百個の監視カメラを掌握しているようなもの。この旅館内で彼女の『目』から逃れるのは困難だろう。そして、このスキルこそが朝倉の異常なまでの情報収集能力の根源なのだ。

麻帆良学園に所属する悪平等は、ノットイコール実のところ結構な数がいるようだ

が、それでも能力所有者は数えるほどしかない。しかし、そのスキルはどれもこれも、私の過負荷に匹敵するほどの厄介さである。
『欲視力』は朝倉の性分に完全にフィットしており、三年前に借り受けて以来、このスキルを十二分に使いこなしていた。

「朝倉、相手の容姿を教えてくれ」

「ええと、眼鏡を掛けたゴスロリの女だよ。年齢は……私らと同じくらいかな？ 刀を二本腰に下げてる」

「分かった。たぶん月詠ってやつだ。桜咲と同じく神鳴流の剣士らしい。桜咲を予想ルート上の空き部屋に配置してくれ。奇襲を仕掛ける」

「はい。すでに対象は玄関に来てるから気をつけて」

息を殺して玄関に通じる廊下の奥に潜む。昨日の誘拐犯、天ヶ崎千草からすでに情報は読み取ってある。相手は裏の世界では結構有名な剣士らしい。昨日の女は桜咲が尋問したのち、結界を張って探知されないように隠したはず。おそらくは雇い主の奪還ではなく、近衛の拉致が目的だろう。

「ちょっと千雨。桜咲が奇襲は嫌だって言ってるんだけど。闇討ちは剣士としての誇りがとか」

「近衛の安全のためだって言って説得してくれ」

まったく、これだから強者の連中は困る。何で戦力未知数の相手にわざわざ勝率を減らさなきゃならないんだよ。明日のためにも、ここで敵を減らしておかないと。曲がり角の陰から通りの奥へと視線

を向けた。

「……隠された心の中、全て暴いてやるよ」

情報の奔流が私の脳内を駆け巡る。現在のアジトの場所から仲間の動向まで。おかげで十分な情報を得られた。満足げな笑みが浮かぶ。あとは、集められた情報を元に今後の予定を組み上げるとするか。

「千雨、もうすぐ対象が予定地点に到着するから巻き込まれないようにね」

了解、と小さく答えて壁の陰に隠れる。こちらの方向へと歩いてくる月詠が、空き部屋の一室の前を通り過ぎようとした瞬間――

――月詠のいた場所が木っ端微塵に吹き飛んだ

「……すげー威力だな」

轟音が響き渡る。空き部屋に隠れていた桜咲による、扉越しに放たれた強烈な一撃。

――斬空閃

その奔流は部屋の扉はおろか、延長線上の壁までも粉々に破壊して月詠の身体を吹き飛ばしていた。神鳴流の技の一つ。衝撃波と共に飛来する斬撃は回避不能の突風である。視界の動きからも計算して、最も無防備な瞬間に月詠の側面から真空波が襲っていた。さらに、刀を構えた桜咲が、追撃のために壁の大穴から外へ飛び出して

いくのが見えた。直後、連続で響く金属音。

「朝倉、どうだ？」

「押してるよ。さっきの不意打ちで左腕に深手を負ったみたい。たぶん、桜咲なら勝てると思う」

「そうか、わかった」

そう言って私はこの場を離れる。これ以上、私にできることはない。不意だがイベントに戻るとするか。人気の多い場所へと足を向ける。そのとき、曲がり角の向こうにネギの反応があった。おそらく桜咲の起こした騒ぎを聞きつけてやってきたのだろう。

「足止めしておくか」

慌てて走っているのだろう。急激に距離が縮まっているのを感じる。ネギが曲がり角にやってきたタイミングに合わせて、私も陰から飛び出した。

「わあああああ！」

「うわっ！」

ドンツと目論見どおりにお互いが激突した。勢いよくぶつかった私達は、もつれ合うように床に倒れこむ。よし、これで少しは時間が稼げる。内心でほくそ笑んだ私だったが、しかし、ひとつだけ忘れていたことがあった。このガキは、呪いでも掛かっているのかというほどに女運が良いということ——

「んむうつ!？」

床に倒れた私の口からくぐもった声が漏れた。それと同時に床に描かれた魔方陣が光を放つ。反射的に事態を悟り、全身から血の気が引いた。

――倒れ込んだ拍子に、私の唇にネギの唇が押し付けられていた。

キスされた。ファーストキスがこんなガキに奪われた。半泣きになった私の口元がヒクヒクと震える。呆然と魂が抜けたように放心するしかない。球磨川さんに捧げるはずだったファーストキスが……

「ご、ごめんなさい! 千雨さん! あの……!」

「いい。何も言うな」

静かに私はネギの顔の前に掌を出して押し留める。安堵したようにネギが息を吐いた。しかし、私の心の奥からは静かに怒りの炎が湧き上がっていた。殺意と憎悪が渦を巻いて凝縮される。やっぱり負の感情に満たされるのは心地いいな。何気なく右手をポケットへと入れた。その顔には気持ち悪い笑みが浮かんでいたことだろう。ナイフを振り上げ、ネギに突き刺そうと襲い掛かる。

「死ねクソガキがああああああああああ!」

「うわあああああああ!」

それからしばらく命がけの追いかっことは続き、最悪なことに『修学旅行でネギ先生とラブラブキッス大作戦!』は私の優勝となったのだった。

7時間目「化物だろうと劣等だろうと」

翌朝、私の前には泣きそうな顔のネギが挨拶に来ていた。ぺこぺくと頭を下げて恐ろしそうにこちらを窺っている。昨日、殺そうとしたのがトラウマになったのだろうか。だけど、トラウマはこちらの方である。人のファーストキスを奪いやがって……。

「あ、あの……これ、仮契約カードです」

「ああ、これが……。わかった。あと、昨日のことはなかったことにしろよ」

その手からカードを手荒に受け取る。恨みを込めて睨みつけてやるとネギはビクリと身体を震わせた。怒りの表情を浮かべる私に怯えながら返事をする。

「はい！わかりました！じ、じゃあ僕は関西呪術協会の本部に行ってきます！」

逃げるように去っていくネギ。それを横目に見ながら、自分の仮契約カードを手の中にくるくると弄ぶ。そこに描かれているのは、コスプレ衣装を着て、チープなステッキを持つ自分の姿。

「アデアット」

その言葉と共に自分の手に魔法のステッキが現れた。同時に出現した取扱説明書をパラパラと流し読みし、自身のアーティファクトの性能をおおまかに理解する。名称は『力の王笏』。電腦戦特化タイプのアーティファクトか……。これならペンタゴンにでもハッキン

グを掛けられそうだ。そんな万能感を覚えるほどに高性能である。

「ま、こんな長所^{プラス}みたいな道具は使わないんだけどな」

ステッキを消去すると、カードを適当にポケットへと突っ込んだ。こういう長所みたいなのは私の性に合わない。ましてや、あのガキとキスして得た力だなんて、こっちから願い下げだぜ。思い出すだけでも殺意が湧いてくる。

「もったいないじゃん。せっかくだから使ったら？そのアーティファクト」

「冗談じゃねーよ。ったく、元はと言えばお前がゲームに参加させたのが原因だろうが」

背後から朝倉が私の首に腕を回して話しかけてきた。恨みがましくジト目でそちらを見つめるが、しれっと知らん顔をしている。原因ではあっても、こいつに責任がないのは分かっているけど……。

「それで、どうしたんだ？」

「ああ、桜咲が近衛の監視に回ったってさ。他のメンバーにも別行動って話は付けといたよ」

三日目の今日は班行動である。そのため、桜咲には離れたところから近衛を監視させていた。近くで護衛させないのは、敵の尾行者を秘密裏に消すためと言っておいたが、実際のところは同じ班で行動しているネギと神楽坂に見つからないためである。あいつらには、私が桜咲を抑えておくって説明してあるし。ま、桜咲自身も表立って近衛の護衛はしたくないようだし、ネギに見つかる心配もないだ

ろう。ネギと神楽坂はいずれ別行動で関西呪術協会へ行くはずだ。そのときがイベントの開始となるだろう。

「それにしても、やっぱりあんたって最低だよな」

「ん？何だよ、急に……」

朝倉が溜息を吐きつつ、言葉を漏らした。しかし、その顔には面白がるような笑みが浮かんでいる。

「見てたよ。首謀者の女を逃がしてたの」

「そうかよ。だったら止めればよかったじゃねーか」

悪びれない様子で言い返す私に、朝倉は左右に首を振って答えた。

「私が協力してるのは、あくまであんただからね。それに、どうせロクでもないことなんだろうけど、一応考えがあるんでしょ？」

「秘密裏に解決されちゃあ、桜咲の願いは叶わないからな。首謀者のあの女がいないと、実際のところ計画は進まない」

「はぁ、手伝うと言ったからには最後まで協力はするよ。どうせ悪い方向にしかいかなそうだけど」

不吉なことを言うなよ、と軽く笑って私達は班での自由行動に向かうのだった。

近衛の襲撃を企てている連中の戦力は、月詠という剣士が抜きたいま、三人しかない。月詠の感情を覗いたところ、もう一人は未知数だが、犬神という少年は月詠よりもだいぶ格下の戦闘者らしい。そして、首謀者の天ヶ崎の動向は、朝倉の『パラサイトシーイング欲視力』で把握できる。一対三でも、桜咲ならば十分に勝てる戦いだろうと計算していた。だが、相手の目的は戦闘ではない。三人もいれば隙を突いて近衛を奪い取ることが可能だろう。

——さらわれたお姫様を助け出す王子様

それを近衛に見せ付けることが今回の目的である。吊り橋効果も合わさって、近衛が桜咲に並々ならぬ感情を抱くに違いない。

予想通り、ネギと神楽坂が別行動をとって離れた途端、近衛へと襲撃が掛けられた。しかし、残念ながら展開は私の想像とはまったく逆のものとなる。

「まさか、ここまで白髪のがキが強かったなんてな……」

慌てて裏路地へと駆けてきた私が見たものは、手足を石の槍で貫かれ、礫にされた桜咲の姿だった。石柱の乱立した裏路地は桜咲の鮮血でどす黒く染められている。近寄って呼び掛けると、口元から血

を零しながらもかろうじて意識を取り戻した。

「ごほっ……お、お嬢様……」

「おい！大丈夫か！？」

うわごとのようにつぶやく桜咲に大声で呼びかけると、ようやく私のことを認識したようだ。朦朧とした意識でコクリと小さく頷く。そして、最後の力を振り絞って自身を串刺しにしている石柱を砕いた。

戒めが解けた途端、桜咲の身体は地面へと崩れ落ちてしまう。その身体をとっさに抱きかかえるようにして重みを支えてやる。コンクリートの地面には大量の血液で真っ赤な血溜まりができていた。

「ちょっとどいて！治療できるやつ連れてきたから！」

「いきなり呼びつけて何なんすか……って、ええ！？大怪我すぎる！」

切羽詰った風に叫ぶ朝倉が連れてきたのはクラスメイトの春日美空だった。本人は隠しているが、魔法使いである。魔法の腕前は知らないが、シスターだから治療魔法くらい覚えているだろう。いや、偏見だが……。

しかし、幸いにも治療は出来るようで、できなかったら朝倉が連れてくるはずがないが、桜咲の傷が見る見る癒えていく。意外にも見事な腕前。治療が終わると、ぷはっと息を吐いて地面に腰を着いた。

「まったく……朝倉も人使い荒いよ。私の正体は秘密だったのに、

なぜか二人とも普通に受け入れてるしさ」

「まあまあ、もうちょっとだけ手伝ってよ。何でもひとつだけ、好きな情報を教えてあげるからさ」

気を失っている桜咲を地面に寝かせると、春日は疲れたような表情で口を尖らせた。なだめるように声を掛ける朝倉をジト目で見つめている。

「助かったよ、春日。おかげで桜咲も無事に済んだし」

「言っとくけど、あんな大怪我だし、表面的に治しただけで暴れたらすぐに傷が開いちゃうんすから注意してよ」

「そうか。にしても、これはまずい状況だな」

まさか、桜咲を一对一で一蹴できるほどの実力者が敵にいたなんて……。完全にこちらの想定外だ。桜咲はこの怪我だし、戦えるとしてもあと一戦だろう。誘拐された近衛の救出に向かおうにも、こっちの戦力が皆無じゃどうしようもない。少し考えたのち、私は携帯電話を手にとった。番号を呼び出し、通話ボタンに指を掛ける。仕方ない、こうなったら手段を選んでられないよな。

太陽が天に昇った昼過ぎ。山中を高速で移動する物体があった。春

日に抱えられて、目にも止まらぬ速度で運ばれている私と桜咲である。春日のアーティファクトの効果は『脚力を強化すること』。二人を抱えているにもかかわらず、自動車以上の速度で林の中を易々と踏破していく。

「はぁ…はぁ…春日さん、ありがとうございます」

「まあ、乗りかかった船だし。だけど！危なくなったらすぐに帰るからね！」

「そこまでは期待してねーよ。運んでくれるだけでも感謝してるぜ」

怪我で息も絶え絶えの桜咲。戦闘にはまるで期待できない春日。仕事は終わったと班行動に戻ってしまった朝倉。はつきり言って敗北濃厚の布陣である。しかし、すでに近衛が誘拐されてしまった以上、一刻を争う事態なのだ。誘拐犯の目的は、近衛の強大な魔力により大鬼人『リョウメンスクナノカミ』の封印を解き、関西呪術協会に対する武力とすることである。その儀式が終わるまでに近衛を奪還しなければならない。

「しかし、こんな戦力でやるなんてマジっすか……？」

「劣勢なのはいつものことだ。あの白いのが出てきたら、桜咲は先行して近衛を取り戻してくれ。私は足止めしとくから」

さっき姿を現さなかった犬神ってガキが出てきたら諦めるしかない。しかし、それを聞いて桜咲は慌てたように振り向いた。

「ちょっと待ってください！白髪の少年は長谷川さんに太刀打ちできると相手では……！」

「実力差は承知してるって。だけど安心しろよ。勝ちを狙わない勝負なら、私の得意分野なんだからさ」

雑木林の中を跳び回りながら、私は周囲に隠された敵の気配を探る。そろそろ儀式場が近付いてきている。もう敵が出てきてもおかしくない。そんなことを考えていると、押し殺した殺意が脳内へと流れ込んできた。とっさに大声を上げる。

「春日！右に跳べ！」

「え？うおおっ!？」

私の声に慌てて方向転換をした春日。その直後、先ほどまでいた位置には無数の巨大な石の槍が生えていた。地面から突き出されている石柱の針の山に、春日の顔色が一気に蒼白になる。ギリッと桜咲が唇を噛み締めた。

「やあ」

そう言って無表情に片手を上げて挨拶をしたのが、白髪の少年、フエイト・アーウェルンクスである。正面から相對するのは初めてだが、確かにこれは桜咲を瞬殺したというのも頷ける。まるでガラス玉を覗き込んでいるかのような、無機質な底知れない強さを感じていた。球磨川さんとは正逆の意味での非人間的な存在感。

「あ、あのさ……もう帰ってもいいかな？」

声を震わせて怯えたように問い掛ける春日。それに私は、いいよと言葉を返す。

「ま、下手に関わっても死ぬだけだしな。ここまで運んでくれて助かったよ」

「あ、うん……ご、ごめんっ！じゃあ！」

後ろめたさを声に滲ませながらも、それでも死の恐怖には抗えなかったのだろう。逃げるように去っていった。残されたのは私と桜咲の二人。

「君達も逃げて構わないよ。僕の仕事はここから先に誰も通さないことだからね」

「残念だが、私達の目的はここから先に行くことなんだよな」

「そう」

それと同時に、少年から感じる圧迫感が物理的な重さを持つまでに変化する。ちらりと桜咲に目をやると、怪我の影響でおぼつかない手足を震わせながらも、必死に刀を握り締めていた。想像以上に怪我が治っていないようだ……

「無理はしない方がいい。君ほどの使い手なら、僕との実力差は十分に理解できたはずだよ」

「それでも、お嬢様だけは……！」

「ちょ、ちょっと待て！」

激昂して襲い掛かろうとする桜咲の手を掴み、寸前のところで特攻

をやめさせる。思わず冷や汗をかいたぜ。計画が台無しになるところだったじゃねーか。こいつ、本当に近衛のこととなると考え無しだな……

「いいから、こいつは私に任せて先に行けよ」

「……本当にいいんですか？」

小声で囁く私を心配そうに見つめてくる。しかし、近衛を救出するにはその方法しかないのも事実。私じゃこんな山の中を山頂付近まで走りきることはできないし。苦虫を噛み潰したかのような苦渋を滲ませる。そして、意を決したようにその顔に悲壮な表情を浮かべた。不安に揺れる瞳。

「長谷川さん、ありがとうございます。私も出し惜しみはしません。誰にも見られたくはなかったのですが、この醜い姿を晒しましょう」

「桜咲……？」

突如、桜咲の背後に翼が出現した。神々しいまでに美しい純白の翼。その翼が一度はばたくと、その身体は地面を離れ、宙へと舞い上がる。

「私は人間ではありません。人間と翼人のハーフ。混血の化物なんです」

今にも泣きそうな顔で告白する桜咲。過去の迫害により、人間ではないという劣等感と恐怖心が心の奥深くに根付いているのだろう。しかし、彼女に言える言葉は一つだけだ。

「空を飛べるのか。ずいぶんと便利そうだな」

「え？それだけ……ですか？」

「その能力があれば、近衛のところまで飛んでいけるんだろ？化物には化物の特性がある。だったら、お前の翼の意味なんてそれで十分だろ。化物が他人の顔色を窺うなんて馬鹿げてると思わないか？」

呆然とした表情を浮かべる桜咲に言い放つ。私たち過負荷^{マイナス}にとっては疎外と迫害こそが日常。だからこそ、私は彼女の劣等感を肯定する。人間じゃなくても、迫害されても、化物は化物のままでよいのだと。

おそらく私に拒絶されると思っていたのだろう。安心した桜咲の目尻には涙が浮かんでいた。

「私たち過負荷^{マイナス}は、欠点を、劣等感を、そのままマイナスに伸ばしてきた。お前が化物だろうと劣等だろうと関係ねーよ」

「長谷川さん……」

「ほら、さっさと行けよ。時間が押してるぜ」

はい、と吹っ切れたように清々しい表情で桜咲は上空へと飛翔する。それと同時に、私はポケットから仮契約カードを取り出して念じていた。このカードには主と従者での通信機能がある。

「おいネギ！聞こえるか！？」

——千雨さんですか！？は、はい！聞こえます。あの……ごめんなさい！じつは僕たち、結界で鳥居に封じられちゃったみたいで……

「そっちの話はいい！緊急事態だ！急いでこっちに魔力を送ってくれ！敵との戦闘に突入する！」

——ええっ！？いえ、分かりました。すぐに魔力供給を行います。

ネギの呪文詠唱が終わると同時に、全身に力がみなぎってくるのを感じた。これが契約執行による魔力強化か。仮契約カードは使わないつもりだったが、早くも前言撤回してしまった。

私の肉体が魔力強化されたのを確認すると、桜咲は凄まじい速度で儀式場へと飛び立った。しかし、それを阻むように呪文詠唱を完了していたフェイトから、強力な魔法が放たれる。

「先へ進むというなら容赦はしない。——『石化の邪眼』」

「させるかよっ！」

放たれる瞬間に割って入った私の蹴りで、石化効果をもつレーザーは標的を外してしまう。攻撃自体は魔力障壁で止められてしまったが、狙いを逸らすには十分だったようだ。そして、その隙に桜咲はフェイトの攻撃範囲外へと飛び去っていた。それを確認し、やれやれと首を左右に振ってこちらを向くフェイト。その目からは、私のことなど歯牙にもかけていないことが窺える。

「仕方ない。君を倒したあとで儀式場へと向かうでしょう」

「そう簡単にいくと思うなよ」

そして、ナイフを構えた過負荷^{マイナス}と白髪の魔法使いは激突した。

それから十数秒後、この場に立っているのは一人だけだった。無様に仰向けで地面に倒れている私を見下ろして悠然と佇む少年。

「……まさか、この程度の実力で僕の前に立ちふさがっていたなんて。ちょっとした驚きだね」

「ごほっ……これでも、弱いことが自慢でね」

かろうじて上体を起こすが、膝が震えて立ち上がることができない。やっぱり正攻法で太刀打ちできる相手ではなかった。その様子を眺めながら、フェイトは呆れたように溜息を吐く。

「たしかに、いま君が生きているのは僕が手加減しても勝てるほどに弱かったからだ。その点では、自身の脆弱さに感謝すべきだろうね。しかし、目的は果たせなかった」

そう言って、フェイトは踵を返して去っていくとする。これだけの時間では近衛の救出には足りないだろう。万全の体勢で待ち構えている陰陽師相手に、満身創痍の桜咲だ。瞬殺とはいかないはず。もっと時間を稼がないと……。しかし、すでにフェイトの意識からは私のことなど消え去っている。会話で時間稼ぎできる相手ではない。

そのとき、この雑木林にかわいらしい声が響き渡った。

——契約に従い我に従え炎の霸王

無表情を崩さなかったフェイトの顔に、わずかに驚きの色が混じる。
反射的に上空へと視線を向けた。

——来たれ、浄化の炎、燃え盛る大剣

「呪文詠唱……。この詠唱は高等呪文か」

声の方向を探るが、そこには何も存在しない虚空があるだけだ。

——ほとぼしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄

「凄まじい魔力量だけど、来るとわかっていれば防げないものではないよ」

ガウンと火薬の音が響く。その瞬間、フェイトの頭がガクリと勢いよく揺さぶられた。

——罪ありし者を死の塵に

「ぐうっ……銃撃!? しかも、僕の魔力障壁を破るほどの……」

反射的にフェイトの意識が狙撃主へと向かってしまう。それを後悔する時間はない。詠唱が完了する。

——『燃える天空』

視界が業火に包まれた。遅れて届く轟音と焼け付くような熱気。タンカーでも爆破炎上したかのような想像の限度を超えた爆発に、私の認識が追いつかない。しかし、ひとつだけ理解できることがある。

「助かったよ、超」

トンツと軽い靴音を立てて私の横に降り立ったのは、超鈴音だった。その身体にはボディアーマーらしき装甲と、光学迷彩のマントを纏っている。私が援軍として呼んでいたのが、『麻帆良の最強頭脳』こと、この少女だった。フェイトの意識を探ってみるが、すでに感じられないということは倒したということだろう。全力を出した超の実力は、麻帆良でも五指に数えられるほどの最強クラス。危機が去ったことを確認し、ホッと安堵の息を吐いた。

「久し振りに魔法を使ったせいで、身体中がバラバラになりそうだよ」

軽そうな口調で話しているが、超が魔法を使う代償は大きい。すでに全身を絶え間ない激痛が襲っていることだろう。そこまでして助けに来てくれたことに対して、素直に感謝の言葉を告げた。

「ここが麻帆良だったら助けには来なかったけどネ。ま、報酬ってことでもないけど、私のことは他言無用にして欲しいヨ。機会があれば頼みごとをさせてもらうネ」

「そうか。情報提供くらいならしてやるさ」

同じくクラスメイトの龍宮が、木の陰からこちらへ歩いてやってきた。援軍として呼んだもう一人である。フェイトの注意を逸らした銃撃はこいつのおかげだ。傭兵だけあって、あとで料金を請求されるのだろうが、そのくらいは甘んじて受けてやるさ。どうやら、桜咲が近衛の救出に成功したようだし。

「さてと、じゃあ私達は修学旅行に戻るとするヨ。班のみんなに黙って抜けてきたからネ」

「そうだな。では、また仕事の依頼があれば」

去っていく二人と入れ替わるように、近衛をお姫様のように抱えて飛んでくる桜咲の姿が視界に映った。彼女達の顔には笑みが浮かんでおり、私には珍しく大団円に終わった物語だった。こうして、修学旅行は無事に終了を迎えることとなる。

ちなみに、ネギと明日菜は何とか結界から脱出できたらしい。

8時間目「私の弟子になるというのは」

修学旅行が終わり、午前中に京都から帰ってきた私は、疲れを癒す間もなく自室でPCの置かれた机の前にかじりついていた。旅行中に撮り溜めていた盗撮映像のチェックである。自然と口元には気持ち悪い笑みが浮んでいた。球磨川さんの自宅の部屋から送られてくる映像と音声、画面上に余すことなく投影される。大型のヘッドフォンを装着し、視線は様々な角度から撮影された複数のウィンドウを高速で行き来していた。

「ああ……球磨川さん……」

視覚と聴覚をフル稼働させてPC内へと没入する。その緩みきった恍惚の表情は、普段の無愛想な私からは想像もつかないものだろう。堪えきれずに艶やかな吐息が漏れる。しかし、その至福のひとつきは無遠慮に叩かれたノックの音で中断された。

「まったく、何だよ……」

上気した顔をそのままに、ヘッドフォンを外して部屋のドアを開ける。そこには、ネギと神楽坂の姿があった。……またかよ。一気に興奮が醒めた。おそらく厄介事だろう。何か話したそうな顔をしていたので、立ち話も何だし、二人を室内へと案内してやる。

「あの、千雨さんに相談があって……うわっ!？」

「ひっ!……こ、これはひどいわね」

部屋に入った途端、二人は顔を青ざめさせて口元を引き攣らせた。

失礼なやつらだ。こんな素晴らしい空間は存在しないってのに。二人の反応の理由は、私の部屋の内装にあった。壁一面には球磨川さんの盗撮写真が隙間なく張り付けられており、家具にまでシールとして印刷したものが所狭しと密着していたのだから。ちなみに、身につけている部屋着はゴミ捨て場を漁って拾ってきた、球磨川さんのお下がりのスウェットである。これを着ているだけで、私は球磨川さんと一つになっている感覚が味わえるのだ。まさに樂園。同室のザジが滅多に部屋に帰ってこないからこそできることである。

「ま、他人に理解できるとは思わねーからいいけど。それで、いったい何の用なんだ？」

「そ、そうでした。僕、修学旅行ではあまり役に立たなかったので、修行しなきゃと思ひまして」

私の言葉に、ネギが気を取り直したように答える。ふむ、と口に手を当てて考えるが、しかし私の元へ来た理由がよくわからない。

「それで、誰か魔法を教えてくれる師匠がいないかと、千雨さんに相談しようと思ったんです。他に魔法のことを相談できそうな人がいなかったの」

「そうなのよ。私たちって、他の魔法使いのこと全然知らないし」

はあ、と溜息を吐いた。こいつら、勘違いしてやがるな。たしかにエヴァとはつるんでたけど、だからって魔法に詳しいわけじゃないの……。ネギは学園の魔法先生や魔法生徒のことを知らされてないし、当てにできる人が少ないのは分かるけど。だからって私に聞くのはあまりにも筋違いだ。ま、相談を求められたなら乗ってやるのはやぶさかではない。

「あゝ。高畑先生にでも頼んだらどうだ？旧知の仲なんだろう、師匠には打ってつけじゃないのか？」

「それは僕も考えたんですが……。タカミチは海外に出張したりで麻帆良にはあまり居ないので。それに、僕がこのクラスの担任になったのも、元はといえばタカミチが出張が多いからなんです」

「それじゃあ本末転倒ってことか」

それ以前に、ネギは知らないが、魔法を使えない高畑には魔法使いの師匠は務まらないだろう。いや、戦闘力を上げたいって意味なら役に立つか。

「じゃあ古菲はどうだ？中国拳法の腕は学園でも随一だし、担任だから教えてもらいやすいだろう」

ネギは少し考え込む素振りを見せたが、やはり却下された。

「うーん。たしかに目的は強くなることなんですけど……。魔法使いとしてはどうなんでしょう」

「じゃあ私がくーふえに拳法教えてもらおうかな。部活やってないけど身体動かしたいし」

なぜか神楽坂の方が乗り気だった。部活でやれよと思ったが、別に私には関係ないからいいか。しかし、そうなる選択肢はほとんど限られてきたな。私の口から他の魔法使いについての情報を漏らしたくないし、エヴァはこの間までネギと敵対してたしな。

「学園長に師匠探してもらえよ。ここら一帯を統括してる魔法使いなんだろう？」

「そういえばそうね。近衛のおじいちゃんってイメージだったから忘れてたけど」

「はい！学園長に相談してみます。千雨さん、相談に乗ってくれてありがとうございます！」

そう言って二人は清々しい顔で部屋から去っていった。修行ねえ…：修学旅行では、私と別行動のときに敵の犬神とかいうガキと戦ってたって話だけど。それで何か心境の変化でもあったのだろうか。相手を弱体化するという発想が第一に思いつく過負荷マイナスにとっては、自身の強化なんて発想はむしろ新鮮に感じていた。

それから数時間後、私とネギと神楽坂の三人は図書館島にいた。

「おい、どういことだよ」

「はい。学園長に尋ねたんですが、この図書館島の地下で司書をしている人がいるそうです。その人が僕の魔法の師匠に相応しいだろうと」

「いや、だから！何で私が一緒に付いて行かなきゃなんねーんだよ

「私はあるたの保護者かよ！」

たしかに形式上はネギと仮契約をした従者だけど！神楽坂はいいとして、私は同意してこのガキと契約したわけじゃねーんだぞ！

渋面を浮かべながら口を尖らせる。言われるがままに図書館島まで着いてきた私も私だけど……。それに、別に断る理由もないし構わないといえは構わないんだけど。しかし、ネギはすまなそうな声で謝った。

「すみません。でも、僕が千雨さんの話をしたら、学園長と一緒に連れて行きなさいって」

「学園長が……？」

その言葉を聞いて、私は口の中に苦いものを感じた。小さく表情を歪めて舌打ちをする。学園長にマークされてしまったことに対して内心で反省せざるを得ない。

ここ最近、下手に動きすぎたか……。麻帆良の中では過負荷マイナスという存在はほとんど知られていないが、永い年月を生きるマクダウエルは知っていたし、おそらく学園長も知っているだろう。高畑は微妙なところだが。

しかし、それでも私が見逃されてきたのは、単純に学園で問題を起こしていないからだ。麻帆良の外ではともかく、学内ではマイナス性を抑えていたから無害と判断されていただけなのだ。敵対すれば脆弱な過負荷マイナスなど簡単に排除されてしまうだろう。

「……マクダウエルが許されてるんだから、私も大丈夫なんだろうけどな」

小声でつぶやく。おそらくは様子見だろう。万年人手不足の麻帆良である。修学旅行の際には監視の目はなかったはず。だとすれば、ネギと絡ませて私の性質を見極めようとしているのかもしれないな。

「わかった。行くよ。さっさと案内してくれ」

「ありがとうございます！最下層までは直通路を使わせてもらえるそうです」

「それは助かるわね。図書館島の地下は罠だらけだったし」

そう言って神楽坂は安堵の溜息を吐いた。貴重な蔵書を守るため、図書館島の地下フロアには無数の罠が仕掛けられているのだ。とても私の身体能力で突破できるような容易い仕掛けではない。おかげで、いまだ私も地下フロアには足を踏み入れたことがなかった。

そして、学園長の計らいで最下層まで罠に遭遇することなく辿り着いた私たち。そこで見たものは、巨大なドラゴンの鎮座する広大な空間であった。幻想上の猛獣の迫力には、さすがの私も戦慄を抑えきれない。ひさしぶりに足の竦む感覚を覚えていた。これは番犬のようなもので、学園長の許可を持った私たちには無害だそうだが……。

ドラゴンの居る広場を抜けると、一瞬にして周囲が人の生活の気配のする空間へと変化した。西欧風の部屋のような。そこには、白いローブを全身に纏った男が静かに佇んでいた。

「こんにちは、みなさん。学園長から聞いていますよ。私はこの図書館島の司書を務めているアルビレオ・イマと言います」

爽やかな声音が響き渡る。どうやら、彼こそが目的の人物らしい。慌てて挨拶を返すネギに、私と神楽坂も続く。

「僕はネギ・スプリングフィールドと言います。学園長から紹介されて来ました」

「神楽坂明日菜です」

「……長谷川千雨です」

アルビレオと名乗った男は、私たちに視線を向けると面白そうに笑みを浮かべた……ように感じた。どういうことだ？正面に立っているのに、相手の内面が一切入ってこないのだ。私の脳内を最大級の警鐘が鳴り響く。

「ふふっ……ナギにそっくりですね。礼儀正しいところは似ても似つかないですが」

「えっ？もしかして、アルビレオさんは……」

「アルで結構ですよ。ナギもそう呼んでいました。あなたのお父さんと私は『紅き翼』のメンバーでしたから」

ネギの目が驚愕に見開かれる。『紅き翼』とは、ナギ・スプリングフィールドの率いた伝説の英雄達の名前なのだ。しかし、私にはそんな会話は耳に入っていなかった。目を凝らせば凝らすほど、逆に相手がぼやけるような、どうしてもアルビレオに意識をあわせることができない。

「長谷川千雨さんと言いましたか。失礼ですが、あなたが私を視認

できないように魔法で介入させて頂きました。幻術での変装なら暴かれるのですが、やはりあなた自身の意識を操作すれば過負荷^{マイナス}は発動できないようですね」

「……あんだ、私の過負荷^{マイナス}を!？」

「それにしても恐ろしい過負荷^{マイナス}ですね。魔法による精神防壁を完全に無視できるとは……。しかし逆に言えば、あなた自身も魔法に対する対抗手段はないということ」

駄目だ……。どうしても男を直視できない。霞がかったように焦点が合わせられないのだ。それによって、相手を視認するという過負荷^{マイナス}の発動のプロセスが満たせない。魔法の効果によって、私の過負荷^{マイナス}の脆弱性が露呈されてしまったのだ。学園全域に張られている認識阻害結界程度ならまだしも、私個人の、しかもピンポイントで視覚に効果を集中されては対抗は難しい。

「あー、何の話をしてるんですか？」

「いえいえ、お二人には関係の無い話ですよ。特にこの麻帆良ではね」

神楽坂の疑問に、男はパラパラと手に持った本のページをめくりながら答えた。こうなると、学園長に私の弱点が伝わっているのは間違いない。完全に首輪を付けられた形だ。過負荷^{マイナス}の対策を取られてしまえば、私なんて所詮は一般人に過ぎないのだから。射殺するように男を睨みつけ、ギリッと悔しさに歯噛みする。そんな私に対して、男は飄々とした笑みを見せた。

「そんなに警戒しないでください。タカミチと違って、私は教員で

はないのですから。別に更正させようなんて思っていないませんよ」

その瞬間、ローブの中の顔が女のものに変化した。身長や体格も一回り縮んだように見える。いや、その顔は私のものと全く同じであった。思わず驚きの声を上げるネギたち。

「これが私のアーティファクト——『イノチノシヘン』。その効力は特定人物の身体能力と外見的特徴の再生。しかし……やはり過負荷^{マイナス}の使用は不可のようですね。悪平等^{かのじよ}たちのスキルと同様に」

悪平等^{ノットイコール}まで把握してるのかよ。予想以上にこちらの事情に精通しているらしい。本来なら秘密のはずのアーティファクトの説明までしてくれるのは、単純に私が敵になり得ないからだろう。私との間にはそれほどに隔絶した実力差があった。

「過負荷^{マイナス}が麻帆良に来るのは何人目でしょうか。かなりレアな事象なのですよ。ましてや、魔法使いの地である麻帆良で生まれた過負荷^{マイナス}など、おそらくは史上初でしょう。あなたがどのようなマイナス成長を遂げるのか。とても興味深いですね」

私の顔をしたアルビレオは、口元を歪めて意地の悪そうな笑みを作った。話の流れが分からずに困惑した風なネギと神楽坂。しかし、私には目の前の男のこと少しだけ理解できたような気がした。敵対さえしなければ、この男は好奇心や楽しみを優先させるだろう。

「だけど、学園長はどう考えてるんだ？」

「あなたの過負荷^{マイナス}への対策が通用することが確認できましたから。脅威なしとの判断をするでしょうね」

「そうかよ」

屈辱的な評価に私は唇を噛み締めながら短く答えた。話は終わったという風に、姿を元に戻すと、アルビレオはネギの方へと顔を向けた。

「それで、魔法の師匠を探しているということでしたね。どうですか？私の弟子になるというのは」

「え、いいんですか！？ありがとうございます！」

「ええ、時間だけは有り余っていますから。魔法の練習は異空間で行うことになるでしょうが」

瞳をキラキラと輝かせ、大喜びするネギ。父親であるナギ・スプリングフィールドの仲間である彼は、師匠としてはうってつけだろう。魔法学校以外では独学で学んできたネギは、師匠をもつことで飛躍的に実力を伸ばしていくはずだ。

強度を増していく彼らに対して、過^{マイナス}負荷たる私にできるのは――

9 時間目 「ストーカー行為は嫌われるぜ」

休日の私の日課はハッキングである。つい先ほども、制作会社に入り込んで、放送前のアニメやドラマの動画を無断でネット上に大量に貼り付けてネタバレしてきてやったところだ。アーティファクトである『力の王笏』を使えば、一般の会社のセキュリティなど素通り同然。一通り遊び終わった私は、外へ出掛けるために着替え始める。今日はひさしぶりに遠出の予定があった。

「さーて、行くとするか」

私が向かったのは世界樹の前の広場。憩いの場として様々な人の集まるそこには、演舞のように流麗な組み手を行う少女たちの姿があった。チャイナ服に身を包んだ褐色の少女とツインテールの少女が鋭い突きを交わし合っている。

「神楽坂、古菲　！そろそろ時間だぜ！」

集中していたためか、声を掛けると驚いたように二人が振り向いた。組み手を中断してその場へ腰を降ろす。タオルで汗を拭きながらこちらへ声を返した。

「千雨ちゃん！もうそんな時間？」

「ちょっと待ってて欲しいアルヨ」

最近、神楽坂は暇を見つけては古菲に中国拳法の指導を受けていた。ネギがあつた男に師事するようになってから、その影響を受けたのか格闘技の稽古に励んでいるようだ。元々、運動神経抜群の神楽坂で

ある。格闘技にも天稟があったのか、メキメキと中国拳法の腕前も上達していった。と言っても、私には格闘技のことなんて分からないんだけどな……。

「ほら、そろそろ行くぞ」

「はい。わざわざ迎えに来てくれてありがとね」

「……通り道だったから、ついでに寄っただけだよ」

「もう、千雨ちゃんったら素直じゃないんだから」

「本当だって！私をそんな安いツンデレキャラにしようとするな！」

馴れ馴れしく頬を指で突く神楽坂の手を、邪魔そうな表情で振り払う。どうもこいつら、私のことを根は善良だと勘違いしている節があるな。それはマイナス性を抑えているのだから当然かもしれないが、だけど一度正面から敵対したことがあったはずだろーが。これがプラス思考ってやつなのか、と呆れと共に首を横に振った。

それから数分後、私たち三人が到着したのは図書館島。例のアルビレオとやらの住まう地下空間である。しかし、そこには誰もおらず、無人の部屋だけが出迎えてくれた。

「んーと、誰もいないけどどうすればいいアルか？」

呼び出されたにもかかわらず、呼び出した主であるネギが居ないという事態に古菲が困惑の声を上げた。そういえば、こいつがここに来るのは初めてなのか。しかし、私達はすでにネギの元へ行く方法を知っていた。古菲を案内するように私と神楽坂はある地点へ向かって歩を進めていく。床に視線を落とすと、そこには幾何学模様を描いた魔方陣が光り輝いていた。

「これは何アルか？」

「転移魔方陣だ。異空間へと繋がってる。ここは魔法の練習には不便だからな」

魔方陣の中心に足を踏み入れた瞬間、私達の身体が光に包まれた。視界に映る光景が一変し、鮮烈な青色が飛び込んできた。スカイブルーの青空とエメラルドグリーンの海。ここは黄金の砂浜の広がる真夏の海岸であった。

「はー、これが魔法アルか」

「何回来てもすごい場所よね」

雄大な自然を前に二人とも感嘆の溜息を漏らす。そこへ背後から声が掛けられた。

「ようこそ。お待ちしていました」

「アルさん！こんにちは！」

真夏にも関わらず、分厚いローブに身を包んだアルビレオがこちらへ挨拶してきた。例によって、この男の精神を覗くことはできない。

「この人がネギ先生の師匠アルか。あんまり強そうには見えないネ」

「ふふっ……私は体術は専門ではありませんので」

微妙に失望したような表情を見せた古菲に苦笑するアルビレオ。戦闘狂として、彼女は以前から魔法使いと戦いたがっていたのだ。しかし、目の前の男から『気』の強さを受けなかったことから、隠された実力を見抜けないようだ。……もちろん、私も理解なんてできていないんだけど。

「他の方はもういらっしやってますよ」

先導されて向かった先には、肩で息を吐きながら浜辺に寝転んでいるネギと、その周りで世話を焼いている数人の水着姿の少女たちがいた。

「あ！待ってたよ、みんな……ってあれ？くーちゃんも魔法知ってたんだ」

「ハルナも来てたアルか。私は最近仮契約ってのをしたばかりなんだけどネ」

こちらに手を振って挨拶をする早乙女ハルナと、一緒にいる綾瀬と宮崎。いつもの三人組である。彼女達もいつの間にかネギと仮契約していたそうで、そのため今日は呼ばれたのだった。「南の島でのバカンスを楽しんで欲しい」という名目だが、実際のところはネギの従者を見ることがアルビレオの目的だろう。

「個人的には海よりは山派なのですがね。せっかくなので夏に先駆

けて海水浴を楽しんでください」

「は、はい。ありがとうございます」

「ありがとうございますです」

外見からは分かりにくいのが、宮崎と綾瀬も結構楽しんでいるようだ。ちなみに宮崎の水着は、誰かの入れ知恵でもあったのか、ある意味では本人にお似合いの白いスクール水着だった。

「ほら、千雨ちゃんもくーふえいも着替えて遊ば！」

「そうアルね！」

「お、おい。引っ張るなって……」

待ちきれないといった風に、神楽坂が私の手を引いて海辺の別荘へと走っていく。この異空間では時間の流れが遅いんだから、そんな急がなくなっているのに。そんな言葉は誰にも届かずに西洋風の屋敷へと連れ込まれるのだった。

降り注ぐ太陽の光の下、青のビキニに着替えた私だったが、海へは行かずにビーチで再開したネギの修行を観戦することにした。体力馬鹿のあいつらに最初から最後まで付き合ってたら、筋肉痛になる

こと請け合いだからな。遠くの方ではしゃいでいる連中の声が耳に届く。砂浜に刺したパラソルの下、ベンチに寝転がると、視線を対峙した二人へと向けた。

「さて、それでは修行を再開しましょう。今回は実戦形式です。私を倒せたら合格とします」

「はい！」

「今回の対戦相手は——」

数メートルの距離を置いて告げられる言葉に、ネギは真剣な声で返す。そして、ローブの男の手に出現した本を開いた瞬間——

「なっ……！？」

——ローブの中の顔がクラスメイトの古菲のものへと変化した。

これはアルビレオのアーティファクトの効果だ。特定の人物の外見的特徴および身体能力の再生。ローブの中の彼女の顔には、似つかわしくない柔和な笑みが浮かんでいる。そのまま両足を前後に軽く開き、先ほど広場で見たものと同じ中国拳法の構えを取った。

「行きますよ」

直後、その場からかき消える古菲。いや、これは中国拳法における高速移動術であるところの活歩だ。たしか前にそんなことを話していた気がする。この男は身体能力だけではなく、身体に染み付いた技までもを模倣できるのか……！一瞬にして懐に潜り込んだ彼女から、流れるようにしなやかな突きが繰り出される。

——馬蹄崩拳

あまりに鋭い突きにネギは反応すら出来ない。呆然とそれを見つめるだけだ。小柄な少女の姿からは想像もできないほどの重さの拳が、ネギの鳩尾へと突き刺さり――

――感触もなくその身体を貫いた

「これは……幻惑魔法ですか」

離れた場所にネギの姿が現れる。幻覚を見せられたのだ。それを認識し、冷静に少女の口からつぶやきが漏れる。直後、その身体がぐしゃりと地面に叩きつけられた。凄まじい勢いで砂浜が円形に潰される。

「ぐっ……そして、無詠唱の重力魔法、ですか……。覚えが、早くて……結構ですね」

その身体が高重力で潰れ、振じれ、軋む。苦悶の声を漏らす少女に容赦なく掛けられる魔法は数秒間ほど続き、その効果を終わらせた。もはや戦闘不能だろう、と思われた少女だったが――

「ぐっ……！」

再び瞬間移動でもしたかのようにネギの前に出現した少女は、その拳を深々と腹へと突き刺していた。重すぎる一撃にドサリと膝から砂浜に崩れ落ちる。そこで勝負は決着となった。ローブの中の顔が男のものへと戻る。

「中国拳法には『硬気功』という肉体を強化する技があります。彼女の防御を貫くには、無詠唱では連射性と威力がわずかに足りませんでしたね」

「……はい」

アルビレオは落ち込んだような表情で俯くネギの頭に手を置いた。

「落ち込むことはありませんよ。無詠唱の重力魔法と幻惑魔法の使いどころは見事でした。古菲さんは接近戦の専門家です。彼女を相手にここまで出来れば、魔法使いの弱点である近接戦闘もある程度克服できたと言えるでしょうね」

「あ、ありがとうございます！」

「明日からは魔法使いの本分である大威力魔法の講義を始めます。ナギの使っていた魔法も教えてあげますよ」

それを聞いて、嬉しそうに年相応の笑みを浮かべるネギ。それにしても、実力の上昇率がハンパじゃない。師匠が優秀というのもちろんあるのだろうが、ネギ自身の天才性、プラスの絶対値は測り知れない。

「はあ、あいかわらず滅茶苦茶だね。CGでも見てるみたい。こんなの見せ付けられて、創作意欲が湧き上がってこなきゃ嘘だよ」

「そうかい。ま、この空間は時間の流れが遅いから、向こうじゃほとんど時間経過ないしな。夏コミ用の原稿でも書いてたらいんじゃないの？」

「そうだね。修羅場になったら使わせてもらおうと」

早乙女がパラソルの下の影に潜り込んできた。いつの間にか休憩に入ったようで、私の横たわるベンチに連中が集まってくる。優雅な時を過ごしていた空間が、騒がしい女子校の教室の雰囲気変わる。どうやって用意したのか、かき氷や焼きソバまで準備されており、まさに一足早い夏といった感じだ。私もトロピカルドリンクのグラスのストローに口を付ける。

「ふう……平和だな」

「そうですか？」

私の口から漏れたつぶやきに反応したのは、黒のワンピース型の水着に身を包んだ綾瀬だった。先ほどもでは違って、その表情はわずかに暗い影を孕んでいる。何事かと思って聞き返すと、少し躊躇うような素振りを見せたのち、重苦しそうに口を開いた。

「先日、日本屈指の名門校のひとつ、水槽学園が廃校になったそうです」

「へー、ってあれ？水槽学園って確か千雨ちゃんの……」

以前、球磨川さんのことを話したのを覚えていたのだろう。神楽坂が驚いたような表情を見せる。それを聞いて、周囲から気遣わしげな視線が向けられた。しかし、それはまったくの見当外れだ。私は誇らしげな笑みを浮かべるのを堪えるのに苦労しながら、そつなく答えてやる。

「球磨川さんが通っていた高校だよ。ああ、知ってるよ。むしろ、

よくその情報が入ってきたな」

「ええ。私の祖父の友人が、その高校で教員をやっていたそうなので。搬送された精神病院にお見舞いに行ったときに聞きましたです。いえ、とても話を聞ける状態ではなかったので、その家族の方からなのですが」

「ど、どうということ……？　というか廃校って？」

ようやく事の重大さに気付き始めたのか、早乙女の上げた疑問の声もわずかに震えている。そして、それに答える綾瀬の顔は、血の気が引いて青白くなっていた。話すと言う形でさえ関わりたくないと言っても言いたげな暗い表情。

「地獄ですよ。その高校の全校生徒が残らず心を壊されたそうです。伝統ある水槽学園が廃校になったというのに、どこもニュースになっていないでしょう？　それは、誰一人としてその学園で起こった事実を話すことができないからなのです。そして、それほどの大惨事だということです」

場が静寂に包まれた。伝聞だけでも分かる。あまりに不気味で理解不能な出来事に、抑えようもない恐怖と不安を感じていた。ただ一人、私を除いては……。球磨川さんの制圧した水槽学園。さぞや地獄の具現とも言うべき、この世のあらゆる不幸を煮込んで混ぜたような学校だったのだろう。残念ながら中学生なので無理だったが、ぜひとも在学してみたかったな。

「じゃあ、その千雨ちゃんの片思いの先輩も……」

「あ、で、でも……不幸中の幸いというべきか、怪我人はいないよ

うなのです。……いえ、幸いなんて口が裂けても言えないような惨状だったそうですが」

私に向けられる、まるで遺族でも見るかのような同情に満ちた眼差し。慌ててフォローをしようとした綾瀬だったが、慰めの言葉を掛けることさえも躊躇われるほどの悪夢だったのだ。

「そうだな。幸いなんて絶対に言えないはずだぜ。不幸中の不幸と言うべきだ。怪我人無しで廃校にするなんて、どれだけの偉業なのかお前らはわかっていない」

え？と呆気にとられたような視線が集まり、直後にその表情が凍りついた。

「はははははっ！マジで素晴らしいぜ！さすが球磨川さん！暴力という最もお手軽で効果の高い手段を使わず、しかも一人の取りこぼしもなく全員を不幸のどん底に突き落とすなんて——！」

両手を左右に大きく広げて天を仰ぐ。もはや我慢の限界だ。球磨川さんの偉業を讃えて薄気味悪い声を張り上げ、哄笑する。三日月のように薄く吊りあがった口元には、醜悪で気持ち悪い笑みが張り付いていた。

中学を廃校にする際、私は最後の一押しとして、同士討ちという形で生徒同士で傷つけ合わせた。球磨川さんに憧れて始めた学校崩壊という災厄。しかし、強制的に廃校にするにあたっては、生徒達の大半を入院させるという荒業しか思い浮かばなかったのだ。しかし、暴力とは強者の専売特許。本来は過負荷の取るべき手段ではない。まさに役者の違いを見せ付けられた気分だった。最低にして最弱。球磨川さんの絶対性、負完全性を改めて教えられたのだ。そして、

同時に心の中の恋心が燃え上がる。

——私も球磨川さんに滅茶苦茶に壊し尽くされたい。

私のマイナス性に当てられて気分が悪くなったらしく、すぐに本日の海水浴はお開きになってしまった。青い顔をしてとぼとぼと帰る彼女達の足取りはおぼつかない。宮崎などは悪寒に震える手足のせいでしばらく歩けなかったほどだった。

「悪いことしちゃったな。だけど、過負荷マイナスの雰囲気だけであそこまで怯えるとは……。小学生の頃はあそこまでじゃなかったはずなんだけどな」

だとすれば、この数年間で私もマイナス成長を遂げているのかもしれない。強く、賢く、勇敢になるような正方向プラスへの成長とは真逆。弱く、醜く、卑怯になるようなそれは、球磨川さんの隣に立つのに相応しいものだろう。

「球磨川さんの隣に立てるような立派な過負荷マイナスにならねーとな」

すっかり日が沈んだ夕方の空を眺めながら、女子寮への帰り道をひとり歩いていく。休日であるためか、時間のせいか、周囲には人の姿はない。しかし、隠れている気配があった。足をピタリと止める。

「出て来いよ。ストーカー行為は嫌われるぜ」

そう言って振り向いた瞬間、格好付けた言葉も虚しく——私の全身があっさりと大量の液体に包まれたのだった。

10時間目「千雨さんに仇なす者には」

「……さん…長谷川さん！」

「ん……ここは？」

目を覚ました私の視界に映ったのは綾瀬の顔だった。頭を振って、ぼやけた意識を戻しながら周囲を見回すと、裸の少女達が所狭しと詰め込まれていた。綾瀬、宮崎、早乙女、古菲。どれもクラスメイトで、先ほども一緒にだったメンバーである。

「一体どういう状況だ？」

「どうやら私達は拉致されてしまったみたいなのです。おそらくはメンバーから考えて、ネギ先生がらみかと」

拉致か……。確かに、私の最後の記憶も大量の液体に飲み込まれたところで終わっている。よく見ると私達が囚われているのは、液体に満たされた球形の檻のようだ。明らかに魔法的な防壁。殺されてないということは、人質か情報源ってところか？とりあえず、現状はそんなところだろう。

「ふーん、なるほどな。ってか、何でお前ら服着てないんだ？」

「そ、それはですね……」

「お風呂に入っているときに捕まってしまったアル。変な液体に纏わり付かれたと思ったら、ここにワープして……油断したアルよ」

古菲が悔しそうに答える。苛立ちと共に拳を壁面に叩きつけるが、私達を囲む液体の檻はびくともしない。周囲が液体であるため、突きの威力は相当落ちてしまっているし。しかし、古菲で破壊できないのならば、檻の破壊による脱出は不可能だろう。

「にしても神楽坂がないみたいだけど、あいつは無事なのか？」

ネギ関連のメンバーのうち、ひとりだけ姿の見えない彼女のことを尋ねるが、綾瀬は首を横に向けることで答える。檻の外に視線を移すと、両手を頭の上で縛られ、立ったまま拘束された神楽坂の姿があった。なぜかエロい下着を身につけている。野外であんな露出プレイをさせられているあいつの心情を思うと泣けてくるぜ。いや、こんな透明度の高い液体の中で全裸を晒しているこいつらに比べたらマシか。とにかく、これでネギの従者は全員が囚われたってことだな……。

「こうなると、ネギの救援を待つしかねーか」

おそらく敵の狙いはネギだろう。そして、ネギの頭には他の魔法先生に救援を求めるという発想はない。アルビレオには相談するかもしれないが、あいつは学園長に報告するだろうか……？ 修行の成果を試す機会として、ネギが敗北してから報告しそうな気もする。実際にはどうなるか。やっぱり過負荷^{マイナス}で相手の内面を読めないと予測がつかないな。仕方なく、左右に大きく頭を振って考えを中断した。人任せはやめて、打てる手は打っておくべきだろう。

「古菲、どうにかこの壁壊せないか？」

「こういう魔法の壁は初めてだから確信はできないアル。とりあえず、全力の寸勁を試してみるアルよ」

そう言って右拳を監獄の奥へと伸ばし、液体と外界と間の壁に貼り付ける。そのまま目を閉じて呼吸を整えると、気の扱えない私にも分かるほどに古菲から感じる圧力が大きくなった。その増大した気を一点にて放出しようとして――

「何をしようとしているのかね、お嬢さん方」

「っ……!?!」

外界から声が掛けられ、中断させられてしまう。ビクリと反射的に振り向くと、そこには全身を黒のロングコートで覆った老年の紳士らしき男が立っていた。平然としたその表情から、この人物こそが自分たちを拉致した犯人であると悟る。

「ははは、そんなに硬くならなくとも結構。私の目的はネギくんだけだね。君達に

危害を加える気はないよ」

「そうかい。そりゃ助かるな」

気さくに話しかけてくる老人に返事をする。その間に私は過^{マイナス}負荷を発動させた。何の障害もなく相手の精神に侵入することができ、心中でほっと安堵の溜息を漏らす。そして、同時に自分の心の動きに驚いていた。アルビレオに出会って以来、自身の過^{マイナス}負荷に対する劣^{じん}等感がこれほど薄れていたなんて……。

「あんた! 何で私たちを浚ったのよー! さっさと放しなさいよ!」

「おやおや、元気の良いお嬢さんだ」

外で拘束されている神楽坂は、じたばたと手首に巻きついた鎖を振り回しながら暴れていた。それを微笑ましそうに見つめる男。しかし、その平和そうな光景に騙されてはならない。

——上位悪魔、ねえ

人間の姿を取っているが、この男の正体は悪魔で名前はヘルマンというらしい。そして、私を捕らえているこの水球の檻はスライムで出来ている。ヘルマンという男、こちらに害意はありませんといった様子だし、目的はネギと戦うことのようなのだが、実際は私達を処分する可能性も考えていた。この男は才能のある少年以外には興味が無いのだ。依頼の目的である神楽坂は誘拐していく予定だが、利用価値の無い私達を生かしておく理由はないとのことだろう。最悪、このスライムの成分を強酸の溶解液に変化させ、消化して証拠隠滅を図ろうとまで考えていた。

「おい、古菲。奴の注意を引くから、その隙にこの檻を叩き壊してくれ」

「えっ……いや、わかったアル」

耳元で囁いた私の言葉に古菲は小さく頷いた。さりげなく壁面に拳を置き、静かに気を練り上げる。気付かれているだろうか。暴れる神楽坂と会話をしながらもヘルマンの注意はこちらへと注がれていた。先ほども気の高まりを感知してこちらへと声を掛けたのだろう。

「なあ、あんた私達を生かして返す気なんてないんだろ？」

「なぜだね。それは誤解だよ。目的はネギくんだっただろう？」

無関係な君達を手には掛ける意味なんてないさ」

「生憎、私にはそんなプラスな発想はできなくてね。無関係ってのは殺されない理由がないってことだろ？」

ポケットからナイフを取り出し、刃を露にする。他の連中と違って入浴中に転移された訳ではないため、衣服と持ち物は没収されずにいたのだ。しかし、それを確認したヘルマンは呆れたように溜息を吐いた。

「その檻はナイフで斬れるような甘いものではないよ。ましてや、気も魔力も使えない無力な人間にはね」

「お見通しみたいだな。ま、無力で非力なのが私たち過負荷^{マイナス}の特徴だしな。だけど、力が無いからといって、勝てないからといって、——無害なわけじゃないんだぜ」

そう言って私は鋭く研がれたナイフで、——自分の左腕を斬りつけた。

「何だっ！？」

動脈を切り裂かれた私の腕から、勢いよく赤い液体が噴き出していく。明らかに致死性の傷だが、そんなことは私には関係ない。周囲の液体と鮮血が混ざり合って真っ赤に染まる。本命である古菲への視界が遮られていく。しかし、そんなことは些事であろう。一切の躊躇も無く、笑顔を浮かべて自身の動脈を深々と切り裂いた人間を前に、明らかにヘルマンは硬直してしまっていた。理解できない存

在を目の当たりにしたその表情がおかしくて笑ってしまう。自分が悪魔よりも最低な存在であるということに、満たされるような嬉しさがあった。

「おい、古菲。まだかよ？」

いつまで待っても壊れない深紅の檻に、怪訝に思っただけは小さく声を掛ける。視界が真っ赤に染まっているため、他の連中の様子が分からないのだ。しかし、返ってきた言葉は予想外のものだった。

「ご、ごめんアル。集中が解けて……も、もう無理アルよ」

「くっ……早く浄化するのだ！」

ヘルマンの怒声によって周囲の赤色が透明に戻っていく。私の腕もスライムが強く巻きついて止血を行っていた。そして、透明になった檻の内部は凄惨な状況だった。全員が死人のように青ざめた表情で、寒気を覚えたように両手で自身を抱き締めている。頼みの古菲も、私のマイナスに当てられて、とても技を放てる状態ではなさそうだ。

「……ミスったな。なるほど。プラスとマイナスが共闘しようとする、こうなるのか」

「いやはや。何ともおぞましい存在だ。君のような人間は初めてだよ。しかし、そのおぞましさをゆえ、他人と共闘することはできないようだ」

「そうみてーだな」

やれやれと首を横に振って答える。だけど、これでも構わない。ヘルマンは先ほどの急激な緊張の反動でわずかに気が緩んでいる。だったら、私の本命が届くはず。

「無駄なあがきはもうやめておくのだね」

「そうするよ。私にできるのは他人の足を引っ張ることだけだからな」

その瞬間、ヘルマンの背後に跳び掛かってくる人影が見えた。背後からの奇襲。恐ろしいほどの速度で接近するそれに、私は一切の反応を表さずに会話を続ける。それにより、ヘルマンの反射がわずかに遅れてしまった。

「そのようだ……ぬっ!？」

人影が振り下ろした日本刀がとっさに振り向いて伸ばした右腕に衝突した。ガキインと鈍い金属音が響き渡る。しかし、それで体勢が崩れたヘルマンは、続く斬り上げの一撃をバックステップによって回避する。しかし――

「ぐっ……」

――避けたはずの一撃によって縦一文字に血液が噴出した。

「――斬魔剣式の太刀」

凍えるような冷たい声が響く。

「桜咲さん!？」

そこには一人の少女の姿。桜咲刹那だった。私が携帯で救援のメールを送っていたのだ。

「き、君は……」

「仕留めそこないましたか。ですが、神鳴流は退魔の剣。確実に滅させてもらいます」

鋭い眼光で手傷を負ったヘルマンを睨みつける。その瞳には暗く燃え滾る炎が浮かんでいた。膝を着いて掌で傷口を押さえるヘルマンに再び相対する桜咲。その視線がちらりとこちらに向いた。

「よくも千雨さんを……! 貴様には送還など生ぬるい」

そう怨嗟の言葉を吐くやいなや、一瞬で距離を詰めた桜咲は目にも止まらぬ速さで刀を振り下ろす。ヘルマンも必死に魔力強化した身体で対抗しようとするが、無数の斬撃を前にしてはともにも捌ききることができない。乱反射する閃光のように、剣閃が走るたびに浅い傷が生じていく。

「死ね! 死ね! 死ね! 死ね!」

鬼気迫るとはこのことだろう。悪鬼のような形相で恨みと憎しみを込めて刀を振るい続ける桜咲。その姿はあまりにマイナスで、醜悪なものだった。

「千雨さんに仇なす者には死を!」

あまりに狂信的な叫び。周りのやつらが訝しげな視線を私に向けるのを感じた。ドン引きしたような表情が浮かんでいる。いや、まあ確かに私のせいではあるんだが……。

修学旅行以降、私は休日桜咲と出掛けることが多くなった。どうも人外としての自分を受け入れてくれたのがよほど嬉しかったらしく、やけに懐かれたようだった。近衛との仲を取り持とうとしたはずだったのだが、予想外の結果である。そして、放課後も私の部屋で過ごすようになり。たびたび一緒に行動をすることで、ついにはマイナスな精神性までもが伝播してしまったようだった。

「ぐうううっ……！」

「はあっ！」

鈍い金属音が鳴り響くたび、ヘルマンの身体が右へ左へとピンボールのように跳ね飛ばされる。一撃ごとに苦悶の表情が浮かぶ。上位悪魔をこれほど圧倒するとは、桜咲の人外としての潜在能力は並ではない。人間を超えた種族としての潜在能力を惜しげもなく発揮した剣戟は、あまりにも重く、鋭かった。

「しまっ……」

「隙ありっ！」

あまりにも強烈な斬撃に、とうとうヘルマンの防御が崩された。両腕が弾き飛ばされ、身体が強制的にのけぞらされてしまう。完全にがら空きの体勢。それを見た桜咲は殺意に歪んだ笑顔を浮かべながら、両腕で刀を上段に振りかぶった。

「貴様はこの世に塵一つ残さない。千雨さんに齒向かったことを、後悔しながら死んで逝け」

桜咲の愛刀『夕風』からバチリと雷光が迸る。その輝きは次第に光度を増し、プラズマのごとく青白く変化していく。

「極！大！」

上段に構えた刀身に、指数関数的に気の純度が増大していくのを感じる。極大化した稲妻は刀を媒介に再び圧縮されていく。これが桜咲の全力にして最大の一撃。これが炸裂すれば周囲一帯が更地と化すだろうという確信すら覚える。しかし、気の練り上げと圧縮に時間を掛けすぎた。相手も覚悟を決めたように表情を厳しく引き締めている。ヘルマンは拳をギュツと固く握り締め、腰溜めに構えた。

「雷鳴剣！」

「悪魔パンチ！」

――互いの剣と拳が交錯する。

雷鳴と轟音が炸裂する。まばゆい光と土煙が視界を埋め尽くした。私達の視界が晴れた頃、そこに立っていたのは――左肩から先の消

滅したヘルマンだけであつた。

「桜咲っ!？」

あの凄まじい拳の一撃を腹に受けた桜咲は、気を失ってその場に崩れ落ちる。しかし、ヘルマンも無事ではいられず、左肩の付け根は焼け焦げ、その先は消滅させられていた。

「はあ……はあ……恐ろしい一撃だった。しかし、私への憎しみゆえか、威力だけにこだわっていたために何とかカウンターを合わせられたがね」

紙一重の勝敗を分けたのは、私から学んでしまったマイナスの感情だった。先ほどの激突で生じたクレーターの中央で、一人は倒れ、一人は立っている。決着はこれ以上なく桜咲の敗北だった。救援に来た桜咲の敗北に、他の連中も沈んだ面持ちで黙り込んでしまっている。かく言う私も、これで万策尽きたと言わざるを得ない。先ほどのドタバタで携帯電話はスライムに奪われてしまったのだ。

「さて、彼女は君が呼んだ仲間だね？ 長谷川くんと言ったかね。君だけは先に殺しておくでしょう」

「おいおい、私達に危害は加えないんじゃないのか？」

「君は危険すぎる。前言は撤回させてもらおう。召還されただけの私とて、死にたいわけではないのでね。君に関わっているのは、無事に送還されるという確証すら覆されそうだ」

死の予感に私の背筋に悪寒が走る。こいつ、スライムに命じて私を殺す気だ。どろどろに溶解させられた自分自身の姿を幻視する。へ

ルマンが命令を発しようとして――

「僕の生徒を返してください！」

「おっさん！リベンジや！」

――箒に乗って現れた二人の子供に遮られた

私達の担任であるネギと修学旅行で敵側についていた犬神小太郎だった。そういえば、ヘルマンの本来の目的はネギだったか……。だけど、犬神はどうして？ いや、二人は共闘するようだし、救援の戦力は高いのは歓迎すべきか。実力では桜咲に圧倒的に劣るネギだが、敵は満身創痍の上に隻腕、しかも二対一ならば勝ち目はある。

「ふふ……待っていたよ。私に勝てたら彼女達は解放してあげよう」

「ネギ、合わせろや」

「分かったよ。僕が後衛をやるから、前衛をお願い」

手負いの魔物であるヘルマンから滾る全力の魔力の奔流に、ネギと犬神は最大級の警戒態勢を敷く。軽い打ち合わせの後、二人は戦闘を開始しようとして――

――突然、ヘルマンが口から血を吐いて地面に倒れ伏した。

「えっ!？」

うつ伏せに倒れたその背中には、巨大な杭のような物が何本も突き刺さっていた。ピクリとも動かないヘルマン。深々と心臓を貫かれ、明らかに死んでいた。

「な、なんや……。何が起きたんや……。!?」

「わからないよ。僕達が来る前にも戦ってたみたいだし、それが原因じゃ……」

ヘルマンの死体に突き刺さっているこれは……。巨大な、ネジ?

『いいや、違うね。さっき戦っていた女の子はそこに倒れているし、この傷は明らかに即死させられたものだよ。何の目的があつてこんなネジで串刺しにしたのかは分からないけれど、これは彼女の仕業ではないだろうね』

「誰っ!?!」

「あんた何者や!」

血を吐いて倒れたヘルマンに視線が集中していて気付かなかったが、死体のすぐそばには一人の男が立っていた。いや、私達には死体との区別が付かなかったのかもしれない。中肉中背、黒髪黒眼、学ランを着ており、一見して普通の学生に思えることこそが驚きだった。なぜなら、その身体から発する気配は、あまりにも不気味で醜悪でおぞましい。全身に返り血を浴び、その両手には死体に螺子込まれたのと同じ巨大なネジが握られていた。

『おっと、そんな目で見ないでくれよ。僕が来たときにはすでにこうなっていたんだ。だから――』

見違えることも勘違いすることもない。まるでこの世の全ての負の要素をかき集めて凝縮したかのようなこの感じ。声も仕草も、存在そのものがマイナス。間違いなくこの気持ち悪さはあの人のものだ。私が恋焦がれていたあの――

『僕は悪くない』

「球磨川さんっ！」

感極まって涙声になりながら、その名前を呼ぶ。感動の再会。長年待ち焦がれた瞬間だった。そして、球磨川さんはこちらを振り向いて首を傾げる。

『えーと、誰？』

11時間目『それじゃ、また』

『なーんてねっ。嘘嘘っ、騙されたー?』

無邪気な笑顔を浮かべる球磨川さん。それを聞いて、ようやく私の硬直した身体と心がほぐれる。先ほどの『えーと、誰?』というのは冗談だったらしい。他の連中はただならぬ気配を放つ球磨川さんを前に、緊張したように押し黙っている。

「じ、じゃあ私のことを覚えてくれていたんですね!」

『うん。兄さんから聞いてるよ。確か、長谷川さん……だったよね』

「お兄さん? え、じゃああなたは……」

『僕は球磨川禊の双子の弟で、球磨川雪って言います!』

「え、マジですか……?」

球磨川さんと瓜二つ、っていうか違う部分が見えないんだが。カメラ越しとはいえ、毎日観察している私にも分からないなんて……。困惑した表情を浮かべる私に、球磨川さんが満足したように笑う。

『あは! というこれも冗談でしたー』

「はは……相変わらずですね、球磨川さん」

『ひさしぶりだね。千雨ちゃん、元気だった?』

「はい。球磨川さんのおかげです」

知らないうちに私の顔にも笑みが浮かんでいた。なごやかに再会を喜び合う私達に、周りから何とも形容しがたい視線が集まる。しかし、夢見心地の私にはそんなものは全く気にならない。視界は球磨川さんのみで占められていた。自分でも表情が蕩けきっているのが分かる。

『それにしても、お友達はずいぶんと過激な格好だね。目の遣り場に困るよ』

「え？ きゃああああっ！」

「きゃっ！ 見ないでくださいー！」

困ったように首を傾けながら発した球磨川さんの言葉に、私以外の全員がはっとしたように自分の格好を思い出し、一斉に悲鳴を上げた。そういえば他の連中は全裸だったな。顔を真っ赤にして恥ずかしそうに身体をよじっている。両手で胸と股間を隠そうとしているが、焼け石に水。あごに手を当て、球磨川さんはじっくりとその天国のような光景を眺めていた。

『もう少し眺めていたい気分だけど、嫌がる女子中学生を視姦する趣味はないからね』

「つて、こっちに近寄らないでくださいです」

こちらへ歩み寄ってくる球磨川さん。そのまま私達を捕らえている水球の表面に手をかざすと――

「えっ？」

——水球が消滅していた

「あれ？何で私たち制服を着てるの？」

「え……どうなってるアル」

何事もなかったかのように周囲を覆っていた液体が消え去っていた。同時に他の連中が全裸からいつもの制服姿に変わる。狐に化かされたかのような感覚。

「千雨さん、腕……」

「なっ……！？」

いつの間にか自傷したはずの左腕が治っている。傷の跡すら残らずに、まるで怪我なんてしなかったかのように。そんな馬鹿な！何の感触もなかったのに……。でも間違いない。物理法則を無視したかのようなこの現象。

——これこそが球磨川さんの過負荷マイナス

啞然とした表情で固まる私の顔を、球磨川さんはニヤニヤと楽しそうに見つめている。

『その顔が見たかったんだ。満足したよ。わざわざ監視カメラの前では過負荷マイナスを隠してた甲斐があったぜ』

「き、気付いてたんですか？」

『上手く隠してたけどね。でも僕みたいな弱者は、他人の視線には敏感なんだ』

「すみませんでした。失礼なことをしてしまつて」

惹き付けられ、引き込まれるような錯覚。底知れない闇の深淵に魅入られるようなマイナスのカリスマ性を感じていた。これを知つてしまえば何かが終わってしまうという確信。初めての感覚だった。他人の隠された内面を知りたくないと思うのは――。しかし、夢のようなひと時は背後で立ち上がったヘルマンによつて覚まされる。

「……これは一体どういふことかね」

無傷のヘルマンが頬を引き攣らせ、困惑した様子で自分の左腕を眺めている。ネギ達からも驚愕の声を上がった。それも当然だろう。

――即死したはずのヘルマンが生きているのだから。

しかも、桜咲に消滅させられたはずの左腕が元通りに戻っている。球磨川さんの過負荷マイナスは治癒能力なのか……？ いや、過負荷マイナスとは自身の内面が反映されるもの。球磨川さんからそんなスキルが生まれるはずはない。

『うん？ 怪我してたみたいだったからさ。元なおに戻しておいてあげたんだよ』

「いいのかね。私は彼女達の敵なのだが」

『あはは、何か勘違いしてるみたいだね。まさか僕が、囚われのお姫様を助けに来た王子様にでも見えるてるの?』

ヘルマンの疑問を面白そうに笑い飛ばす。

『学校見学をしてただけど、道に迷っちゃってさ。途方に暮れていたところなんだよ。いやー、やっぱりこの学校すごく広いね』

「ちょっと待ってください! あなた、いったい何をしたんですか!」

とうとう我慢できなくなったのかネギが大声で叫ぶ。その顔には得体の知れないものを見たかのように歪んでいた。

「あなたからは魔力を全く感じません。それなのに結界の解除や治癒まで……」

「えっ……どういうことや。あいつの使った能力は西洋魔術やないのか? 気や東洋呪術でもないで!」

ネギと犬神の顔に警戒の色が浮かび上がる。物理法則を覆す魔法や気を知るがゆえに、過負荷^{マイナス}へ対する警戒や困惑は大きかった。

『魔法に呪術に気、ねえ。まるで漫画の世界に入り込んだみたいだね。ま、でも取り込み中だったみたいだし、僕はもう帰らせてもらうよ』

「あっ! そういえば!」

慌てて復活したヘルマンへと振り向くネギと犬神。ここまでしつちやかめっちゃかにかき回されて、すでに戦う気分など消え失せていたようだが、かろうじて互いに構える様子だけは見せることに成功した。しかし、それに割り込むように男の声が響く。

「悪いけど、——この件はもうお開きで頼むよ」

「ぬっ……ぐがああああああ！」

突如、ヘルマンの身体がベキベキと鈍い音を立てながら吹き飛ばされた。暴風のような衝撃が通り過ぎる。強烈すぎる不可視の一撃にヘルマンが瀕死の重傷を負わされてしまった。十数メートルほど先に着弾すると、ゴロゴロと転がり、そのまま無慈悲に活動を停止した。次第に身体が薄くなっていき、術者の元へと送還される。

「な、何が……」

トンツと靴音が鳴る。そこには両手を白スーツのポケットに入れた元担任教師、高畑の姿があった。その瞳に普段の優しげな色はなく、ただ鋭く球磨川さんを見据えていた。

『あれあれ？ 一体どうしたの……うぐっ！』

「止まりなさい」

「動かないでください。逆らえば折ります」

現れた高畑に気を取られたその瞬間、球磨川さんが地面に組み伏せられた。背中で腕を極められ、首筋には日本刀の刃を突きつけられている。空繰と葛葉先生だ。それを合図に、周囲に大勢の人々が現

れはじめる。数十人を超えるスーツや制服やシスター姿の人間達。

「なんやこいつら!？」

「タカミチに茶々丸さん!？それに他の先生たちも……。一体どうなってるの?」

「ネギくん。悪いけど説明は後にしてほしい」

「それに……。学園長まで……」

球磨川さんを囲むように出現した魔法先生、生徒たち。その輪の中から歩み出てきたのは、この麻帆良学園の長である学園長だった。そして、同時に学園最強の魔法使いでもある。

「さて、球磨川禊くん。三年前は言葉を交わすことすらできなかったのな。改めてお願いさせてもらおうかね。今後、この学園の敷地に足を踏み入れないでもらいたいのじゃ」

『それはお願いじゃなくて脅迫っていうんじゃないの?』

「ほっほっ……。その通りじゃよ。三度目は無いと警告しておく」

好々爺然とした態度だが、その瞳は老人とは思えないほどに鋭い。多人数で囲み、拘束し、暴力を背景に脅しを掛ける。さすがは魔法界の重鎮。平和ボケした教師連中とはまるで別物だ。

『うーん。どうしょっかなー』

しかし、相手は球磨川禊。暴力や迫害は慣れっこである。この絶体

絶命の状況でもニヤニヤと笑顔は崩さない。

『ねえ、あなたが学園長なんですよ？僕のポケットから取って欲しいものがあるんだけど。取ってもらえないかな』

「ほう……構わんぞ」

ツカツカと靴音を立てながら近寄っていく学園長。その距離が数メートルほどに縮まった瞬間、いつの間にか拘束から逃れていた球磨川さんが襲い掛かった。

『なーんてね！』

「学園長！下がってください！」

意識の隙をついた攻撃に学園長は反応することができない。巨大なネジが顔面に迫る。しかし、その寸前に球磨川さんの身体が膝から崩れ落ちてしまった。ガクリと地面に倒れこむ。慌てて球磨川さんは周囲を見回した。

『ぐっ……狙撃！？膝を撃ち抜かれた！？』

よろよろと片足だけで立ち上がりとする球磨川さん。しかし、もう片方の膝も撃ち抜かれ、今度こそ地面を舐めさせられることとなる。両膝を潰され、みじめに地を這う球磨川さんに私の怒りの限界が沸点を超えた。ナイフを構えて学園長に殺意と共に斬り掛かる。

「てめえら！球磨川さんに何してやがん……なっ！？」

強制的に全身の動きが止められた。手足を拘束され、地面に引き倒

されてしまう。私の手足に絡まるこれは……糸、か？

「貴様も動くな。ただでさえこの男相手に気は抜けないんだ。これ以上、過負荷マイナスは関わるな」

「……マクダウエル！」

「それにしても、貴様相手に過負荷マイナスには慣れたと思っていたが……。やはりこの男は別格か」

拘束から逃れようと暴れるも、やはり簡単に解けるものではなさそうだ。悔しさに唇を噛み締める。頼みの過負荷マイナスも、すでに私の認識を弄られ発動することが出来ない。こんなときに球磨川さんの役に立てないなんて……！

『ひどいなー。ただの高校生に実弾をぶち込むなんて、人間のやることとは思えないよ。そうは思わないかい？』

両足から血を流しながら、球磨川さんは笑顔で周囲の教師達へ声を掛ける。しかし、同情を誘うはずのその言葉は虚しく響くだけだった。この場にいる全員が、ずりずりと腕だけで地を這いずる球磨川さんの姿に言葉を失っている。あまりにも醜悪で見るに耐えない光景。混沌よりも這い寄る過負荷マイナスに、教師陣でさえ思わず短い悲鳴と共に後ずさっていた。

『いったーい。これ一生歩けなくなっちゃうかなー。膝の腱が切れちゃってるよ。骨も砕けちゃってるし。あ、でも少し痛くなくなってきたかも。治ってきたのかなー？それとも壊死する兆候かなー』

動作も声も、その全てが気持ち悪い。凍りついたような沈黙がこの

場を支配する。再び球磨川さんと学園長の距離が詰まり、手を伸ばせば届く距離になったとき、ついにその両腕までもが撃ち抜かれてしまった。

『うぐっ……』

両手両足を撃ち抜かれ、とうとう沈黙する球磨川さん。しかし、その顔には変わらずに笑みが浮かんでいた。まるで銃撃されることなど日常の出来事に過ぎないという風に。はじめは高校生を多人数で囲んで銃撃することに拒否反応を示していた者も、いまでは納得せざるを得なかった。これはただの人間ではない。常識どころか常識ですら超えるマイナスだと。

『ねえ学園長。僕のポケットから取って欲しいものがあるんだけど』

「……」

『僕を信じてよ。ねえ、お願いだからさ』

「……いいじゃろ」

「が、学園長……!?!」

再び球磨川さんに近付いていく学園長に、周りの教員達が悲鳴を上げる。そのまま球磨川さんの前に座り、学ランの上着のポケットに手を入れた。そこから取り出されたのは、白い封筒だった。

『開けていいですよ』

「これは……!?!? 麻帆良学園への転入許可証、じゃと!?!」

驚愕の声と共に顔を引き攣らせる学園長。それが示す事実には、この場の全員の顔が歪み、不安の渦に突き落とされることとなった。

『はい。つい先日、僕の通っていた水槽学園が廃校になってしまいましたね』

「しかし、誰がこんなものを……」

『過負荷のことを周囲に隠してきたのは失敗でしたね。何も知らない高等部の教頭先生が書類を受理してくれましたよ。すでに僕は正式にこの学園の生徒ということです。まさか、侵入者でもない自分の学園の生徒に、これ以上の暴行を加えたりはしませんよね？』

そう言葉を発した途端、地面にぶちまけられていた血の海が消失した。同時に、手足に負った怪我までもが完治する。何事もなかったかのように立ち上がった球磨川さんは、踵を返して去っていくようにする。

「なっ！？一瞬で傷が消えて……それにボロボロの制服までもが！？」

『明日からご指導ご鞭撻のほど、よろしく願いますね。先生方』

ゆっくりと去っていくその姿を止めようとする者は誰もいなかった。道端に捨てられた猫の死体に遭遇したときのように、これほど最低な人間と関わってしまった自身の不幸を嘆いていた。明日からの悲惨な未来を想像し、誰もが洩面を浮かべている。例外は蕩けたように表情を緩ませている私くらいのものだろうか。そんな他人の気も知らず、球磨川さんは去り際に手を上げて無邪気に微笑む。

『それじゃ、また』

——これが負完全、球磨川禊の壮絶すぎる初登校の顛末であった。

12時間目「私が成敗して差し上げます！」

翌日、球磨川さんの事情を尋ねるため、様々な生徒が私に接触を図ってきた。まず、登校した私を待っていたのは神楽坂や綾瀬などのネギ陣営。

「ちょっと千雨ちゃん！どうなってんのよ、あの人！」

「あれが噂の球磨川禊！？いや、やばすぎでしょ、あれ！」

「というか、水槽学園にいたと聞いたのですが。どうして無事に転校してきてるです！」

教室に足を踏み入れるやいなや、掴み掛かるように迫ってきたクラスメイト達を何とかなだめようと手を前で振ってみせる。

「おいおい、落ち着けて。球磨川さんのことを私に聞かれてもわかんねーよ。実際に会ったのは、これがまだ二回目なんだから」

しかし、この返答は不満らしい。疑わしそうな瞳で見つめてくる。

「でも、千雨ちゃんなら何か知ってるんじゃない？だって……」

「ストーカーだったんだし、か？知らねーよ。あんなトンデモな能力は隠されてたみてーだし」

「本当に……？」

「本当だって。私が嘘吐いたことなんてねーだろ」

「その言葉が一番嘘くさいけどね」

とりあえず、こいつらには誤魔化しておいた。

昼休みに現れたのは悪平等ノットイコールである朝倉だった。

「でさ、『負完全』球磨川禊のこと、教えて欲しいんだけど」

「情報料は？」

「そうねえ……。学園長の動向ってのはどう？」

その条件を聞き、あごに手を当てて少しだけ考え込む。私の知っている情報なんてたかが知れている。教えても問題ないか？ いや、と首を左右に振った。

「やっぱりその取引は吞めないな。球磨川さんから何かあったら連絡するよ」

悪平等と過負荷ノットイコール マイナスの関係を考えると、あまり軽々しく情報は与えない方がいいだろう。畏情報を掴まされるかもしれないしな。球磨川さんの転入によって、この学園の悪平等ノットイコールの態度がどう変化するのが分からないうちは信用することはできない。

最後に現れたのは、放課後の下駄箱で待っていた超だった。彼女が

告げたのは短い一言。その顔に普段の大胆不敵な笑みは浮かんでおらず、苦々しく歪んでいた。

「私達の計画に関わらないでもらいたいネ。そう伝えて欲しいヨ」

「……わかった。って言っても球磨川さんがどうするかはわかんねーけどな」

「構わないヨ。それに確約されたとしても、彼の言葉を鵜呑みにはできないしネ。まったく……ここにきて最悪のイレギュラーが発生したヨ」

わずかに憔悴した風に溜息を吐く超。

「過負荷マイナスの連中は、敵に回すには醜悪すぎるし、味方に回すには最悪すぎるヨ。距離をとって第三者として眺めるくらいが限界ネ」

「というのが今日の顛末です。球磨川さん」

放課後、そんな感じで今日の出来事を球磨川さんに報告していた。ついでに校舎の案内をしながら麻帆良を歩く。これってもしかして初デート！？なんてテンションを上げていたが、球磨川さんの顔はまるで普段通りだった。

『なるほどね。だいたいの情勢は理解できたよ』

「それと、学園側からは特に接触はありませんでした。球磨川さんの方はどうでした？」

『僕のところには誰も来なかったよ。とりあえずは様子見ってところかな』

こうしている現在も監視の目は感じられない。あれだけ球磨川さんを警戒していた学園長だ。いつまでも野放ししてことはないだろうが……。

『話を聞く限り、この麻帆良における勢力は三つだね。まずは魔法先生、魔法生徒による学園治安維持組織。二つ目が学園内の悪平等ノットイコール。そして、三つ目が超鈴音を始めたクーデター組』

「そうですね。ちなみに、ネギ先生一派は学園側と見ていいでしょう」

『まず学園治安維持組織についてだけど。これは戦闘力における最大派閥だね。学園の上層部を占めているというのもあって権力的にもそう。僕たちにとって、当面の敵はここだね』

楽しそうに話す球磨川さんに小さく頷く。目下の脅威はここだ。すでに宣戦布告されている立場だし。ただし、正式な組織であるがゆえに、学園の生徒である私達の排除は簡単ではないだろう。腐っても教育機関だということだ。

『二つ目の悪平等ノットイコールについては……考えなくていいよ』

「なぜです？数は少ないとはいえ、誰も彼も厄介なスキルを保有している能力保有者ですよ？」

『安心院さんが封印されている今、彼女たちは組織立った活動はしていないからだよ。どこの勢力に付くにせよ、それは群体としてではないからね。個々の動きならそれほど脅威ではないよ。その朝倉さんって娘だってそうだろう？』

「そうですね。あいつなら学園の悪平等の情報統括できているはずですが、特に連絡を取っている様子はないですし」

そして、一般生徒の大半も悪平等のはずだが、それは考慮する必要はないだろう。普通の生徒が障害になるとは思えない。

「じゃあ、最後のクーデター組についてですが……。いいんですか？超の計画について話さなくても」

『うん。僕が下手に知っちゃうと、逆に邪魔しちゃうかもしれないしね。千雨ちゃんがお世話になった人なんですよ？エリートなのか負け犬なのか判断しづらいけど、千雨ちゃんに免じて彼女の条件を呑んであげるよ』

「そうですか。ありがとうございます」

一通りの話が終わり、最後に着いたのは世界樹の前だった。そこには屋久島の杉なんて相手にもならないほどの大樹がそびえ立っている。そして、広場には誰もいない。人払いの結界か……。いや、そこには二人の少女がいた。

「お待ちしておりましたわ！球磨川禊さん！長谷川千雨さん！事情は分かりませんが、とにかくあなた方は学園の敵らしいですわね！」

「ちょ、ちよつと……。まずいですよ。先生たちからも関わらないように厳命されてるのに」

「お黙りなさい！教師陣が手を出せないのなら、私が成敗して差し上げます！」

高飛車そうな声を上げる金髪の先輩を、気弱そうな少女が困ったように止めている様子だ。片方の金髪は聖ウルスラ女子高の制服。もう片方は私の中学の後輩の二年。読み取ってみると、どちらも魔法生徒のようだ。同時に、すべての魔法関係者が私の認識に干渉してくるわけではないと知れて安堵する。

『まあまあ、喧嘩はやめなよ。取り込み中みたいだし、僕たちは席を外すからさ』

「お待ちなさい！私の目の黒い内はあなた方の好き勝手にはさせませんわ！」

金髪は頭に血が上ったように顔を赤くして、球磨川さんの言葉に突っ込みを入れる。

「おいおい、一体何が問題だって言うんだ？今のところ、私達に問題を起こしたつもりはないぜ。それとも、ここは素行に問題のない生徒を無理矢理退学にするような横暴な学園なのか？」

「そ、それは……」

「そうですよ。だからお姉様も帰りましょうって」

私の正論に金髪がたじろぐ様子を見せた。ま、実際には排除すべきなんだけどな。過^{マイナス}負荷を内部に置いておくなんて、治療せずにガン細胞を放っておくようなものなんだから。この金髪はそれを本能的に感じ取っているのだろう。それでも一向にこの場を離れようとはしない。それどころか、呪文を詠唱し、周囲に影でできたらしい人間大の人形を大量に出現させた。

「お姉様ー！使い魔なんて出しちゃダメですよー」

「いえ、彼らはここで倒しておかないといけませんわ。そんな嫌な予感がしますの。悪く思わないでくださいね」

そして、手を前に振り出すと、同時に十数体もの仮面の影が襲い来る。幸いにも動きの速さは人間相当。とりあえず私でも何とか初撃を回避することができた。しかし――

『ぐえっ！』

潰れた蛙のような呻き声を上げて、あっさりと球磨川さんが殴り飛ばされていた。運動不足の中学生女子よりも弱いのか……。

『いったー。千雨ちゃん、何とかしてよ』

「そうしたいのは山々なんですけど……。私の過^{マイナス}負荷は戦闘には全く役立たずで」

『そういえば、まだ千雨ちゃんの過^{マイナス}負荷ってどんなのか聞いてない

よね？教えてよ』

敵襲の最中とは思えないほどの落ち着きようだが、私もそれほど切迫感はなかった。飛んでくる拳を地面を転がり、間一髪で回避する。そして、球磨川さんのそばに近寄り、耳元で囁いた。

『私の過負荷^{マイナス}』事故申告^{リップ・ザ・リップ}』の効力は――『他人の隠し事を読み取ること』です。申し訳ないですけど、戦闘では使えません』

どうやって逃げましょう、と続けた私の言葉は、しかし球磨川さんには届いていないようだった。呆気にとられたような表情を浮かべたあと、すぐに楽しそうに声を上げて笑いだす。

『あははははっ！なるほどね。過負荷^{マイナス}のスキルは生まれつきじゃなくて、環境で決まるとは言うけど。あはっ、こうなるのか』

「ええと……どうしました？」

『いやいや、何でもないよ。やっぱり僕がこの学園に来たのは意味のあることだったみたいだ。千雨ちゃん、僕を見ててよ』

「え？あ、はい」

「……話は終わりですか？」

律儀な性格なのか、金髪は私達の内緒話が終わるのを待っていてくれたようだ。いや、それとも強者の余裕なのかもしれない。先ほどから防戦一方だし。

「どうします？この学園から出て行ってくださるのなら、これ以上

の手は出さないことを誓いますわ。学園長も推薦状くらいなら書いてくださるでしょう」

『うーん。でも、転校してすぐにまた転校じゃ、両親が心配するしな。とにかく、これは反論の余地ないよね。――僕は悪くない』

金髪が呆然と立ち竦むのが見える。なぜなら、いつの間にか――

「なっ……!?!め、愛衣っ!」

――隣にいたはずの後輩が、全身をネジで貫かれて磔にされていたのだから。

「あ、あなた何を……。まるで……時間がなかったことにされたみたい……!」

当事者には何が起こったのか分からなかっただろうが、私には見えた。二人の弱点、意識の隙を突いて走り寄る姿を。そして、ネジを肉体的・精神的な死角に螺子込んだのだ。

「あなたたち!許しませんわ!」

後輩の少女に駆け寄って涙を流していた金髪は、怒りと共に影に号令を発した。多数の影の使い魔が私達に向かって再び襲い掛かる。

『じゃ、あとは頼んだよ』

「え?ちょ、ちょっと球磨川さん!?!……ごふっ」

そう言って球磨川さんは私の後方へと逃げてしまった。先ほどよりも速度を増した影の攻撃が、容赦なく私の身体を捉え、打ちつける。殴られ、ふらついたところに加えられる追撃。為す術なくその場から弾き飛ばされた。

「く、球磨川さん……」

後ろを振り向くと何も言わずにこちらを見つめている球磨川さんの姿があった。その瞳には何か期待するような色が映っている。長年、球磨川さんを見てきた私にはそれが分かる。だったら、その期待には応えないと。

『僕を見ててよ』

さっき球磨川さんが私に伝えてくれた言葉を思い出す。球磨川さんがネジで磔にしたことも。そして、ふと疑問を感じた。どうして自分は球磨川さんの動きを理解できたのか……。

「ぼうっとしている暇があるのですか！」

「くっ……」

左右から迫る二人の攻撃を背後に跳ぶことで回避する。さらに繰り出される一撃を、今度は右へステップして紙一重でかわす。前髪が拳圧で揺れる。四方八方からの攻撃はやむことはない。

「ぐうう……さっきから、ちょこまかと！」

その暴風のような攻撃を回避しながら、私は困惑していた。どうし

て回避できているんだ？さっきまでボコボコに殴られていたっていうのに、今では余裕をもって避けられている。

『どうやら掴んだようだね』

聞こえた声の方向に視線を向けると、そこには満足気な笑みを浮かべた球磨川さんの姿があった。

『それが、きみのスキルの戦闘への活用法だ。千雨ちゃんは昔から固定観念が強かったからね。気付かなかったのも無理はないかな』

「あなた達！おしゃべりしている余裕なんてあるんですか！」

『でも、面白いよ。確かに有り得ない話じゃない。あの状況ではこんな過負荷マイナスが生まれるのか』

私の心が誇らしい気持ちで満たされる。これは確かに私にとって最高で最低の過負荷マイナスだ。カチリと懐から取り出したナイフの刃を外気に晒した。これをどう突き立てれば良いかも感覚的に理解する。軌道とタイミングも体が勝手に動いてくれるはずだ。すべては一瞬の出来事。

「これで終わりで——かはっ！」

——金髪ののどにナイフが突き刺さっていた。

「これが私の過負荷マイナスの本当の効果。——『相手の弱さを見抜くスキル』」

『そう。僕と出会ったことで生まれたのなら、確かにそれがふさわしい』

この世の弱さという弱さを知り尽くした球磨川さん。その固有スキルを私は手にしていたのだ。圧倒的な歓喜に満たされ、自身の顔に気持ちの悪い笑みが浮かび上がるのを感じる。

のどを切り裂かれた金髪は、呪文詠唱をすることもできずに噴水のように鮮血を撒き散らしながら地面に倒れ伏した。魔法使いの弱点はのどなのだ。

『でも、彼女たちに手を出してしまった以上は僕たちの負けだよね。これからは大手を振って僕たちを排除しにくるはずさ』

苦々しく自分の唇を噛み締めた。確かにそうだ。どちらが先に手を出したかなんて水掛け論になるだけ。こちらを処分する建前を作ってしまった形だ。

『ま、この娘はあとで生き返らせるとして。はい、千雨ちゃん。きみになら計画を託せそうだ』

「……何です、その紙？」

球磨川さんは鞆からクリップで留められた分厚い紙の束を取り出した。それを私へと差し出す。

『千雨ちゃん、この学園で次に行われるイベントって何か知ってる？』

「麻帆良学園祭ですよ。」

『違うよ。その前に行われるイベント。まーでも、千雨ちゃんは興味なさそうだしね』

渡された紙の束に視線を落とす。その表紙に書かれていたのは『生徒会選挙立候補要覧』の文字。

——生徒会選挙？

「ええと、これが何か？もしかして、生徒会役員に立候補するつもりなんですか？」

『惜しい。訂正が二つあるね。一つは生徒会役員じゃなくて生徒会長に立候補するつもりだってこと。そして、もう一つは——』

——千雨ちゃんも立候補してもらうってこと

「ええっ！？どういうことですか。というか、私達すでに三年じゃないですか!？」

『この学園は半期ごとに選挙を行うんだから、三年でも立候補可能だよ。僕は麻帆良本校男子高等学校、きみには本校女子中等学校で生徒会長になってほしい』

「球磨川さんの頼みでしたら是非ありません。でも、どうして生徒会長になんか……?」

困惑を隠しきれずに尋ねる。それに対して球磨川さんは、私の持っている紙の束を指して答えた。

『読んでみなよ。その29枚目の学園則第二十条十三項。まさに襲撃されるのが日常茶飯事のこの学園ならではだよね。生徒会が乗っ取られたときのことまで考えて学園則が作られてるなんてさ』

「これは……！」

『第二十条十三項「麻帆良学園における二名以上の生徒会長の連名により、他校の生徒会業務を停止し、これを引き継ぐことができる」』

そうか！この麻帆良には多数の学校が存在している。先ほどの金髪の聖ウルスラ女子高等学校や麻帆良工科大学や麻帆良芸術大学、それに伴う付属校など十や二十では済まない数なのだ。本来は生徒会業務を行えなくなった学校や問題のある学校の業務を、他校が引き継いで運営するというものだが。それを逆用して麻帆良を掌握しようという計画なんて！

『とはいえ、問題も多いけどね。最終的には学校間の勢力争いになるし。でも、まずは生徒会長にならないと』

「わかりました！必ずや当選してみせます！」

決意を込めて球磨川さんに宣言した。正直、自信なんて無い。だけど、球磨川さんの計画は成就させると決めたのだ。

『ありがとう。じゃあ、始めようか——生徒会選挙を』

そして、これが麻帆良学園を二分する学園間抗争。学園を震撼させる恐怖の始まりだった。

13時間目「立候補してくれ」

翌日のクラスは大騒ぎだった。普段は全く生徒会選挙なんて興味の無い連中だが、クラスメイトが立候補したとなれば気になるものらしい。たとえそれが、クラスで特に目立つ訳でもない私であっても。

「ねえねえ、千雨ちゃん！生徒会長に立候補したんだって？」

「はー、そういうの興味なさそうに見えて、意外と熱血なんだねー」

「私達も投票するからね！」

中学校の選挙なんてのは、大抵がクラスからやりたくもない奴が無理矢理出馬させられるか、あるいは内申点狙いの連中である。受験生である三年を除いた各クラスから、それぞれ一名ずつ役員に出馬させられるのが通例であった。しかし、それでも学園をより良くしようという志の高い生徒も少なからずおり、そういった真剣に選挙に取り組む連中こそが私の敵となるだろう。とにかく、まずは選挙活動だ。

「千雨さん、生徒会長に立候補したそうですね。正直、あまり想像付きませんが」

「ははっ、自分でもそう思うぜ」

「ですが、もちろん応援しますよ。とりあえず、剣道部の部員は千雨さんに投票させますのでご安心を」

「手荒な真似はよしてくれよ」

目の前の桜咲に苦笑しながら答えた。マジで強制的に投票させそうな凶々しい瞳である。

「それより、桜咲に頼みたいことがあるんだが……」

「何ですか？私にできることなら何でもしますが」

「お前も生徒会に入ってくれないか？私だけだと今後が大変そうだし」

私の言葉を聞いた桜咲の顔に困惑の色が浮かぶ。しかし、すぐに喜色満面の笑みへと変化した。私の肩を掴んで嬉しそうに顔を近づける。こちらが引くほどの喜びようだ。

「もちろんです！千雨さんと一緒に過ごせるなら喜んで！部活なんてクソくらえです！」

「そ、そうか……助かるよ。役職はどうする？字も上手いし『書記』にするか？」

「役職なんて何でも構いません！さっそく立候補の書類を貰ってきます！」

そう言うやいなや、凄まじいスピードで桜咲は教室から走り去っていった。

自身の選挙活動と平行して、私は生徒会役員の選定を始めていた。負完全に完成している球磨川さんならば、メンバー集めなんて必要ないのだろう。しかし、私には弱さを補う仲間が必要だった。スケジュールを考えれば、わざわざ時間を掛けて生徒会役員を掌握してられないというのもある。そのため、私は生徒会役員の候補者たちに声を掛けていた。

「へえ、面白そうな話だね」

「お断りさせてもらうネ」

朝倉と超。呼び出した二人の反応は対照的なものだった。

「んーと。じゃあ、朝倉は了承ってことでいいか？」

「いいよ。これからの騒動を観察するには絶好のポジションだしね。役職は『会計』でお願い」

「わかった。助かるぜ、朝倉。私達の行動の邪魔をしない生徒ってのは少なくてな」

「立候補するからって当選できるかは保証しないけどね。じゃ、詳しい話はまた明日にしてよ」

話は済んだという風に、手を振って去っていく朝倉。そして、残された超はやれやれと首を左右に振った。

「言ったはずネ。過^{マイナス}負荷の味方は必要ないヨ。特に学園祭の差し迫ったこの時期にはネ。プラスにマイナスを加えたら、マイナスになるだけヨ」

やはりと言うべきか、にべもなく断られてしまう。それでも説得するしかない。これから私達が巻き起こすクーデターに与する、もしくは傍観してくれそうな人はほとんどいないのだ。

「別に味方になってくれなんて言わねーよ。ただ、生徒会役員に敵対者が入っちゃうと話が進まねーんだよ。こっちはこっちで好きにやるからさ。敵対さえしなければ、お前は傍観者でもいいぜ」

「距離が近すぎるネ。球磨川禊の影響下にいやおうなく置かれそう
だヨ」

説得を試みるが、やはり超は難色を示している。元々、過^{マイナス}負荷の敗北のジンクスを気にしていたしな。

「……いや、もう遅いカ」

少しの間あごに手を当てて考え込んだ後、超はポツリとつぶやいた。苦虫を噛み潰したような渋い表情を浮かべている。

「すでに過^{マイナス}負荷の勢力は動き出しているし、麻帆良にいる限りは球磨川禊を無視することはできないカ。すでに、マイナス要素の使い方を考えないとならない展開に入っているのかもしれないネ」

球磨川さんが学園に侵入してしまった以上、災厄としてのマイナスから無関係でいることなど不可能なのだ。あとは、どう関わるかだけ。これから麻帆良には嵐が巻き起こるだろう。もはや、暴風圏外

に逃げることはできないのだ。

「出馬の件、承諾するネ。役職はどうすればいいカ？」

「『副会長』をお願いするぜ」

「仕方ないネ。せいぜい第三勢力として有効に活用させてもらうヨ」

生徒会メンバー集めと同時に、当然ながら選挙活動もしなければならぬ。というか、こっちの方が本来なら問題だろう。たいして目立たない生徒である私は、普通に選挙を行っても当選することが困難なのだ。

しかも現在の私達は、ある程度は正攻法で臨まなければならないのだ。権力で勝る学園側が手を出してこないのは、あくまで正式な学校行事であるからに他ならない。魔法使いには、不法な魔法使用を防ぐための厳格なルールというしがらみがあるのだ。暴力で無理矢理に票を集めるなど論外。即刻、立候補取り消しにされてしまうだろう。こうしている今も監視の目が突き刺さっていた。ま、それもやり方次第だ。

「あ、ちょっといいかな？ 私は三年の長谷川千雨っていうんだけど」

「はい。長谷川先輩、ですね。それで話というのは……？」

「ああ、これを見て貰いたくてね」

がらんと人気の無い空き教室。そこへ呼び出したのは元生徒副会長にして、今回の生徒会長に立候補している後輩である。人望も厚く、今期は生徒会長当選は確実ともっぱらの噂だ。そんな彼女に見せたのは一枚の携帯の画像。

「なっ……!?!」

——そこにはベッド上で撮影されたと思われる裸の男女の姿があった。

「駄目だぜー。中学生がこんな不純異性交遊してちゃあさ」

「そ、そんな…何で……」

手を口元に当て、顔を青ざめさせる少女。怯えたように震える後輩に向けて、薄笑いを浮かべながら声を掛ける。

「PC内にこんなハメ撮り画像を保存しちゃ危険なんだよね。ネットを通して侵入するなんて簡単」

「か、返してください!」

「そうだよなー。そんな画像が出回ったら大変だよなー。もし騒ぎになったら最悪、退学かも」

「な、何が目的なんですか……? 私の家に……お金なんてありませんよ」

「話が早くて結構。じつは私、今期の生徒会長に立候補しててね。ま、単刀直入に言うところ——立候補を取り消してくれないか？」

涙を浮かべ、絶望的な表情で懇願する少女に対して、私は脅迫の言葉を返してやった。想定外の条件に一瞬だけ呆気に取られた風に口を開ける。しかし、すぐに訝しげな視線が向けられた。生徒会長にこだわる理由が分からないのだろう。本来、生徒会長になったところで実利的なメリットなんてほとんどないのだから。

「これは親切で言ってるんだぜ？別にこの画像をばらまいて強制的に支持率を下げてでもいいんだから」

「す、すみません……言うとおりにします。ですから、どうかその画像だけは……」

それを聞いた途端、自分の立場を思い出したのか、再び自殺しそうなほどに顔面を蒼白にさせてしまった。そんな彼女に対して、私は安心させるようにほがらかに笑い掛けてやる。

「そうか、ありがとう。ははっ、そんな怖がるなよ。鞭ばっかりじゃ気の毒だし、あんたにもメリッットの飴をあげるからさ」

しかし、甘い言葉にも目の前の少女の固い表情はまるでほぐれない。恐怖と薄気味悪さに襲われ、手足が震えてしまっている。まるで、私のマイナスで心まで凍りついてしまったかのようだ。そんな彼女に顔を近付け、下から覗き込むように瞳を見つめる。

「ほら、一緒に映ってる彼氏に付き纏っている女いるだろ？去年、生徒会で書記やってたさ」

「……っ!？」

「邪魔だっと思ってたろ? もうそんな苛立ちに心を痛める必要はないぜ。私はそいつの弱味握っててさ。教えてやるよ。彼氏を寝取られる前にどうにかしたいって思ってただろ?」

少女は怯えを瞳に映しながら、コクリと頷くしかなかった。完全に心を折られ、その場に立ち竦む少女の耳元で一言二言を囁いた。これで用事は済んだ。ちょうど休み時間終了のチャイムが鳴り、私は踵を返して去っていった。教室への帰り際、私は懷から手帳を取り出すと、書き並べられた名前の内の二つをペンで塗り潰した。気持ち悪い笑みを浮かべ、つぶやく。

「これで二人が辞退、と」

選挙とは立候補者の中で一位になれば当選するという制度。だとすれば、自分よりも人気のある生徒を減らしていけば、普通の選挙活動をして、そこそこの支持率の私が当選することになるのだ。誰がどの程度の支持率を持っているかは、学園を歩き回っていれば自然と読み取れる。こういった立候補者を減らす作業は得意分野。脅迫と誘惑ならば学園で私の右に出るものなどいないだろう。

その日の夕方、学園から離れた林の中に建てられたログハウスを訪

れていた。そこに住んでいるのはエヴァンジェリン・マクダウエルと絡繰茶々丸の二人。いや、正確には吸血鬼とアンドロイドなので人ではないが。そんな二人の家を訪れた私は、単刀直入に用件を切り出していた。

「マクダウエル、生徒会役員に立候補してくれないか？」

「断る」

マクダウエルはあっさりと拒否の言葉を吐き、ズズ…と紅茶に口を付けた。考える素振りも見せずに断られてしまった。ま、想定内の話ではあるが。

「一応、理由を聞かせてくれないか？」

「フン…：そもそも承諾する理由が無いだろうが。なぜわざわざ面倒事を引き受けねばならんだ。過負荷マイナスに関わるとロクなことがない。それに、私が学園の警備員だということを忘れたのか？」

「警備員だからって何の問題があるんだ？これは正式な学園の行事じゃねーか」

「何か企んでいるというのが透けて見えるぞ。あの男、球磨川禊に関わってメリットなんて一つもないだろうが」

忌々しげな渋面を浮かべるマクダウエルの言葉に、首を横に振ることで答える。

「いやいや、もちろんメリットは提供するつもりだぜ」

「ほう……言ってみろ。この場で叩き出したいところだが、聞くだけ聞いてやろう」

「それは助かるぜ。ナギ・スプリングフィールドが生きている、つてのは知ってるな？」

「ああ、そのようだな」

「——会いに行きたくはないか？」

ゴクリと目の前の少女が息を呑んだ。空気が変わる。マクダウエルが目付きがわずかに鋭くなった。相手の魔力が少ないがゆえに私の過負荷^{マイナス}は十分に発動できている。心の隙を突いた一言に反論の言葉はない。現在のマクダウエルの生きる指針は、学園の治安維持でも吸血鬼としての力を取り戻すことでもない。

——自身の恋焦がれるナギ・スプリングフィールドに再会すること

それ以外は彼女にとっては些事に過ぎない。私の言葉でそれを自覚したようだった。だるそうな表情は一変し、目的を思い出した彼女の顔には肉食獣のごとき獰猛な笑みが浮かんでいた。

「人間の寿命を吸血鬼のあんたと一緒にしちゃいけないぜ。こんな学園でのんびりしてる暇なんてないんじゃないか？」

「……この身体は『登校地獄』の呪いと学園結界に縛られている。それをどうにかできるというのか？」

「そうだ。学園から離れられない呪いと学園内で力を封印する術式。この二つを無効化すれば、あんたは晴れて自由の身となる」

それが出来れば苦労はしない、とマクダウエルが懐疑的に向けられる。英雄ナギ・スプリングフィールドの施した呪い。麻帆良の科学技術と魔法技術の粋を結集した学園結界。どちらも門外漢の私達に解呪も解除もできる代物ではない。いや、球磨川さんなら可能かもしれないが、その必要もないだろう。なぜなら――

「――麻帆良学園都市そのものを壊滅させる」

「何だと……!？」

「球磨川さんの目的は麻帆良に在籍するエリートを抹殺すること。抹殺といっても精神性をマイナスにするだけだから安心していいぜ。廃校に通うことはできないし、電力が通わなくなれば結界も解かれるだろうよ」

何でもない風に話す私を前にして、少女の顔に戦慄が浮かぶ。しかし、すぐにその顔には愉しそうな笑みが戻っていた。嗜虐的に笑うマクダウエルの様からはマイナスの雰囲気は漂っている。そう、恋に綺麗ごとはいらない。

だって――恋は戦争なのだから。

「面白い。たしかに、私らしくもなく飼い慣らされていたようだな。くくっ……悪の魔法使いとして、最悪の吸血鬼として、――再び麻帆良に反旗を翻すでしょう」

「感謝するぜ。役職は『庶務』で立候補してくれ」

「ああ、そうだ。ひとつ言い忘れていたが、仕事は茶々丸にやらせるぞ。雑用なら得意分野だしな」

「はいはい。まったく……怠惰な吸血鬼様だぜ」

完全に仕事をする気のない少女に小さく苦笑する。いや、私も実務は超と朝倉に任せようと思ってたんだけどな。にしても、これで生徒会役員への根回しは済んだ。あとは選挙活動を行うだけだ。

それから一週間後、生徒会選挙の投票結果が発表された。半数近く
の立候補者が棄権したが、無事に生徒会役員の選抜は終了したのだ
った。その内訳がこちらである。

『生徒会長』 三年A組——長谷川千雨

『副会長』 三年A組——超鈴音

『会計』 三年A組——朝倉和美

『書記』 三年A組——桜咲刹那

『庶務』 三年A組——エヴァンジェリン・マクダウエル

――麻帆良学園女子中等部史上、最低の生徒会が発足した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1485y/>

長谷川千雨の過負荷(マイナス)な日々

2012年1月13日01時07分発行